
明清・群星興亡賦～親王ドルゴンの理想

亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明清・群星興亡賦／親王ドルゴンの理想

【Zコード】

Z3673M

【作者名】

亀

【あらすじ】

十七世紀初頭、中国は明王朝の時代である。

中原から遠く離れた満州の地に興つた後金国（後の清）は、年々大國明の圧迫に苦しんでいた。だが本作の主人公ドルゴンは、持ち前の政治手腕で草原の民をまとめ、明をも打倒しようと大望をいだく。やがて万里の長城をも越えることとなるドルゴン、果たしてその先に待ち構えているものとは……。

明清の興亡を動乱の世に翻弄され続けた一人の舞姫の運命とともに描いていきたいとおもいます。

第一幕 主な登場人物

【後金陣営】

ドルゴン（多爾袞）……本編の主人公、ヌルハチの第十四子、睿親王。知略に優れ、優れた政治手腕をもつてヌルハチ、ホンタイジの果たせなかつた山海関越えの悲願を達せんと欲す。

ヌルハチ（奴兒哈赤）……ドルゴンの父、全女真族を統一した希代まれに見る英傑、國号を金（後金）と定め大汗に即位、サルフの会戦で明軍をも一蹴するも、寧遠で袁崇煥に敗れ、明征討はならなかつた。

ホンタイジ（皇太極）……ヌルハチの第八子、後に國号を清と改め初代皇帝に、三百年続く大帝国の礎を築く（母・葉赫納喇氏）

ダイシャン（代善）……ヌルハチの第一子、サルフの合戦では父ヌルハチとともに、明の大軍を迎えうつも、晩年のヌルハチとは対立したといわれる。滿洲八旗のうち正紅旗の旗主（母・？佳氏）

マングルタイ……ヌルハチの第五子、滿洲八旗のうち正藍旗の旗主（母・富察氏）

アジケ（阿濟格）……ヌルハチの第十二子、ドルゴンと母を同じくする。滿洲八旗のうち正黃旗の旗主

ドド（多鐸）……ヌルハチの第十五子、ドルゴンの同母弟、やや意思薄弱

アミン（阿敏）……ヌルハチの弟シユルガチの第一子、サルフの合戦で活躍するも、後ホンタイジと対立することとなる。満洲八旗のうち？藍旗の旗主

ホーゲ（豪格）……ホンタイジの第一子、満洲八旗のうち？白旗の旗主、後終生にわたつてドルゴンの最大の競争相手となる

鳥拉納喇氏……名はアバイ。ドルゴン、アジケ、ドドの母、十二歳でヌルハチの妾となる。後正妻となるもヌルハチの死後、悲劇的な生涯の結末を迎えることとなる

【明王朝側】

万曆帝（神宗）……明朝十四代皇帝、名宰相張居正の補佐をえて、名君の期待が高かつたが、後、蓄財と享楽に溺れる暗君に転落、二十五年間にも及び、政務に一切関与しなかつたという中国史上前代未聞の皇帝。その無能ぶりは後の世の人をして「明の滅びるはまさに神宗に滅ぶ」といわしめた

泰昌帝……明朝十五代皇帝、皇帝即位後数ヶ月にして謎の変死をとげる

天啓帝……明朝十六代皇帝、明朝の数多い暗君のうちの一人、魏忠賢の専横を許す、趣味は大工仕事

魏忠賢……元無賴の博徒、去勢して宦官となり明の宮廷に仕える、天啓帝時代に権勢の頂点を極め、反対派を次から次へと弾圧、末期明王朝の癌となる。中国史にたびたび登場する悪宦官の典型例

袁崇煥……末期明王朝の運命の担う天才的な軍略家、元は進士に及

第した文人であつたが國を憂え、進んで軍の第一線に身を置くこととなる。ヌルハチと寧遠城で宿命の対決をする。その智謀は人をして今孔明と呼びしめるが、後悲劇的な運命の変転にみまわれることとなる

中華の文明が大輪の花を咲かせる唐土からしてみると、遠く朝鮮とも国境を接する遼東の地は、どこまでも広漠としている。草原と砂漠、そして人影はほとんどない。夜の天空と星の海は、半農半獵という特殊な生活環境にある女真の民にとり、今にも手が届かんばかりに常に眼前に展開している。

時に彼等女真の民が定めた年号によると天命三年である。西暦でいうと一六一七年、中原の地を数百年にわたって支配する明王朝の年号でいうと万曆四十五年、さらに海をへだてた遠く日本の年号でいうと江戸幕府の元和三年、二代將軍秀忠の治世である。

後に賢明なる王メルゲンという意味で、睿親王といわれることになるドルゴン（多爾袞）は、まだ六歳の幼児にすぎない。女真の王族として生を受け、その本拠ヘトウアラ城で天空に一筋の流星を見た。

ヘトウアラ城は女真族が居住する遼東すなわち東北の地において、一代の英傑ヌルハチ、すなわちドルゴンの父にあたる人物が、一六〇三年以降居城とした地で蘇子河の南岸にある。後年興京と呼ばれる地もある。

平地に隆起した丘の上に築城され、丘の上の最高地点でも地表から約二メートル。北側に至っては九メートルほどでしかない。山城であるが平城に近いのである。一重の城壁に囲まれ平面はほぼ正方形。内外の城壁は約五一メートル、南北四六五メートルであつたのに対し、外城は全長五キロほどもあつたという。

ドルゴンは星に導かれるように城の外に出た。以下は幼いドルゴンの記憶の彼方にあり、事実であるか否か定かでない。草原の民は物心つくと同時に騎乗する。よつやく馬を乗りこなすことが可能になつたドルゴンも、厚く織つた黒色の麻の上着を着て、皮の長靴を

履き、さらに弁髪といわれる満洲族独特のヘアースタイルを風にな
びかせ、星が落ちた地点を田指した。

地の果てまでも続く草原を、まだぎこちないが馬で駆ける。むろ
ん馬といつても、小型で驥馬にも等しいものではある。やがて暁が
迫つた。ドルゴンはそこに驚嘆すべき光景を田撃する。それは蜃氣
楼だった。天空の巨大なパノラマに不意に出現したのは、旗袍（チ
ーパオ・今日のチャイナドレスの原型）に身を包み騎乗し、前方を
みすえる夫人の姿だった。

ドルゴンはしばし光景に見入った。生まれて初めて幻惑されたと
いつてよい。そして広漠たる草原の彼方にあるものを知りたいと思
つた。繰り返すようだが、まだドルゴンは六歳である。満洲の地か
ら遠く中原へ、さらにはその彼方へ、ドルゴンは己がいかな星のも
とへ生を受けたかまだ知らずにいる。

中国史は、一面北方に住む騎馬民族との抗争の歴史でもあった。遠く秦・漢の時代には、匈奴といわれる剽悍な騎馬民族が存在し、始皇帝が万里の長城を築き、その侵攻に備えたのは有名な話である。秦・漢以来幾多の王朝が中原に出現したが、その中で純粋な漢民族によつて建国された王朝は漢そして、この物語の時代中原を支配している明くらいのものである。最古の統一王朝といつてよい秦の王室でさえ、遠祖をたどれば漢民族とは似て非なるものであったといつてよい。

また宋は確かに漢民族によつて建国された王朝ではあるが、軍事的には極めて劣弱であった。遼・西夏に圧迫され続け、さらにはトウングース系の金王朝によつて皇帝を虜とされ、華北の支配権をも奪われてしまうのである。自らを文明の中心すなわち『華』と称する中原の王朝にとり、金に対する敗北は国辱といつてもよい。だが宋にとつての恥辱は金に華北を奪われたことのみならず、史上空前の版図を形成し金をも滅ぼしたモンゴルの元により、残された長江以南をも奪われ、完全に命脈を絶たれただつた。

金による華北の支配から元による中国全土支配へと、漢民族にとつての苦難が続いた。明王朝は一三六八年に元を北方へとおいやり、漢民族による中国再統一を実現した帝国である。この王朝は常にモンゴルを恐れた。万里の長城はまぎれもなく秦の始皇帝の時代に築かれたものを端緒とするが、今日見られるように堅牢なものとしたのは明王朝だった。

元を倒し漢や唐にも匹敵する大帝国となつた明王朝。だが建国から約一世纪半を過ぎ、さしも明王朝の基盤も揺らぎはじめていた。歴世の王朝いすれもがそうであったように、宮廷内では宦官（去勢した男子）による専横が目立ち、民は度重なる飢饉そして重税にあ

えいでいた。いや明にとつての危難は内にばかりにあつたのではない。長城の北方に、明に対抗する新たな王朝が出現したというのである。

長城以北に大金国（後金国）といわれる新たな王朝が出現したのは一六一六年、日本でいうと大坂夏の陣の翌年、徳川家康が死去した年ということになる。金国を築いたのはヌルハチという名の英傑で、本編の主人公ドルゴンの父にあたる人物である。ヌルハチとは奇妙な名である。中原の漢民族は奴兒哈赤と呼んだ。この四文字に中原の民の憎悪の一端を読み取ることができる。

後金という国号は、奴兒哈赤がかつて華北を支配した金を意識して、意図的に用いた国号である。何故金という国号を用いたのか、何をかくそう奴兒哈赤等、後に満洲族と名乗る民こそ、かつて金を建国した女真族の末裔だからである。

モンゴルの元に滅ぼされた後の女真族は、長城以北でかつてに比べると、あまりに落ちぶれはてたといってよい。細々ながら半農半獵の生活を続け、明の巧妙な分断工作により幾つもの少部族に別れ永年にわたり争いあつていた。そんな中にあり、愛親覺羅氏族に生を受けた奴兒哈赤は、人物としても、一軍の指揮官としても、また政治家としても長い中国史の中でも傑出した人物の一人であつたといつてよいだろう。

一五八三年、さる不幸な事故により祖父と父を一度に失い、二十五歳にして自立を余儀なくされた奴兒哈赤は、わずか六年後の一五八九年には、建州女真（当時女真族は主に三つの勢力に分かれている。建州女真・海西女真・野人女真である）五部族を統一するに至る。

一五九三年には、海西女真を中心とした九部族連合軍をグレの戦いで打倒し、女真の諸部族の大半を支配することとなつた。

それ以後も東北の地を舞台に快進撃を続けた奴兒哈赤は、

ついに遊牧民の世界で王を意味する、ハーン（可汗）の地位に就き、国号を金、元号を天命とする。この年奴兒哈赤は五十八歳になつた。

この間も明朝は衰退の一途をたどつていた。最大の原因の一つは、日本の豊臣秀吉による朝鮮出兵にあつた。朝鮮への援軍派兵のため膨大な量の銀を損じた明朝は、時の皇帝万曆帝の浪費癖もあって、見る影もなく国力を失つていく。

一六一九年（天命四年）、六十一年をむかえた奴兒哈赤は、明朝から眞の意味で自立するため、生涯最大の賭けにでようとしていた。

天命を背負いし者

明王朝は代々中国東北部の女真族に対し、貿易の許可書である勅書の奪い合いをさせるなどし、巧妙な分断工作をおこなつてきた。結果長春・ハルピン一帯を拠点とする海西女直が四部、遼陽の東方山地の建州女真が五部族、沿海州一帯の野人女真が四部に別れ、互いに抗争を繰り広げていた。

奴兒哈赤は、こうした諸部族の中につて厳密にいえば、建州女真のスクスフ部に属する。奴兒哈赤の勃興期、明は豊臣秀吉の朝鮮出兵への援軍により、急激な勢力拡大を指をくわえて見ていくより他なかつた。だが日本軍が一五九八年撤兵すると、ようやく対策に本腰を入れはじめる。

明と奴兒哈赤の直接の対立の契機は、まず朝鮮人参をめぐつて始まつた。人参と貂皮は、女真にとり明国への最も高価な交易品である。だが漢人は狡猾で、人参が腐敗する時期まで購入を控え、女真側が薄利で売りさばくまで待つ。奴兒哈赤は人参を一度煮てから乾燥させるという画期的な方法で、今までの買手市場を売手市場へと転じさせることに成功する。

奴兒哈赤は明側に高値での人参の買い上げを要求し、明側が拒否すると、五千の軍勢を率いて撫順までデモンストレーションを決行している。人参をめぐる明と女真の対立は年々深刻になる一方だつた。

また直接女真対策にあたる遼東総兵官の李成梁という人物は、長年にわたり奴兒哈赤等と良好な関係を築いてきた。だが一六〇八年、李成梁なる人物はささいな事件をきっかけに失脚。李成梁失脚を機に、明側は奴兒哈赤の仇敵海西女真のイエヘ部を後押しし一気に対決姿勢を強めた。むろん奴兒哈赤も黙つてているわけにはいかず。ついには明との全面対決を決意することとなるのである。

ヘトウアラ城の北門から城内へ赴くと、丘の上に煉瓦造の殿舎や八角堂が目に入る。俗に汗宮大衛門といわれる公的な儀式の場で、その中央の尊王台には奴兒哈赤の姿があった。奴兒哈赤は龍顏鳳目にして、角ばつたあご、鉄のよつた胸板、耳が常人ばなれして大きい。色黒で鼻はすらりとして筋が通つており、そして声は鐘のように大きい。幼いドルゴンの記憶にある奴兒哈赤という人物は、常に慈愛に満ちた父としてではなく、部族を率いる帝王としての勇姿であった。

一六一九年一月、すなわち女眞の年号では天命四年一月、奴兒哈赤は部族のおもだつた者を集め、牛一頭を殺し生贊とし、天地精靈へ打倒明帝国を祈願した。幼少のドルゴンも側近に手をひかれ儀式に参加した。

奴兒哈赤は黄色の朝服に身を包んでいた。黄は中原の王朝では皇帝にのみ着用が許される神聖な色で、奴兒哈赤の明への対抗意識をうかがい知ることができる。奴兒哈赤が祈りを捧げ終わると同時に、整然と列をつくつた楽隊が太鼓や喇叭を奏でる。

満洲では天地精靈を等しく神として崇めるが、特に文殊菩薩への信仰がつよい。おこそかな祈りの儀を終えた奴兒哈赤は、參集された諸将に一段高い壇上から、

「敵は今おおいに奢つておる。そして恐らく我らを小邦と思い侮つておることだらう。なれど大国を小国とするも、小国を大国とするも、全て天命のしからしむるところ。今の明國はかつての明國と異なり、もし一万の兵あらば民は負担に耐えることはできないであろう。もし一千しか兵があらずば、兵と民は余の捕虜とならう。天命はすでに我らのもとにある。戦は必ず勝利するであろう」

奴兒哈赤は虎の咆哮にも似た声をあげた。奴兒哈赤は常に『天命』というものを意識し、自らが天命を受けた者と信じ、人にも語つた。故にこそ年号を天命と定めたのである。この奴兒哈赤の一聲に諸将の間から大歎声があがり、同時に八種類の鮮やかな色を縁どつた旗

が、一斉に、津波のように揺れ動いた。

女真族の軍制は、世に名高いハ旗制である。ハ旗制とは、有事の際に兵士となる成年男子三百人を「ニル（「矢」の意）とし、五ニルを「ジヤラン（一五〇〇人）とするものである。各グサは、それぞれ黄・白・紅・藍、そして？黄・？白・？紅・？藍のハ旗で識別され、そのためハ旗制とよばれた。

「捕られた明の密偵をここへ連れてまire」

重い声で奴児哈赤がいうと、後ろ手に縛られた漢人らしき捕虜が奴児哈赤の前に引き出された。

「よいか、我等は汝等漢人に七つの恨みがある」

奴児哈赤は明国の言葉で密偵に語りかけ、指を折り始めた。

「第一の恨み。我が祖父と父が汝等の誤りにより、一度に命を失うに至った一件」

奴児哈赤「十五の時のことである。当時良好な関係にあつた明の李成梁が、ニカン・ワイランという者がこもる城を攻めるにあたり、和平交渉に赴いていた祖父のギオチャンガと父のタクシを誤つて攻め殺すという事件がおこつた。この一件に関して李成梁は、二人の遺骸と三十の勅書、三十頭の馬を贈り謝罪済みではあつたが、奴児哈赤にとり深い心の傷となつたことはいうまでもない。

「第二の恨み。汝等は我等とイエヘ部との婚姻をさまたげ、イエヘ部の娘をモンゴルに嫁がせるようしむけた件」

一五九七年のことである。対立関係にあつたイエヘ部は一旦奴児哈赤等に和平をもちかけ、イエヘ部の娘が奴児哈赤等のもとに降嫁する段取りとなつたが、イエヘ部はいつまでたつても約束を履行しようとせず、ついには娘をモンゴルに嫁がせてしまつた。イエヘ部の背信を奴児哈赤は、明が裏で糸を引いているものと考え続けてきた。

さうに奴兒哈赤は明人の捕虜に対し、五つの怨恨を並べた。すなわち、

第三の恨み 明国側がお互いに国境を越えないという約束を平氣で破つたこと

第四の恨み 国境を侵した越境者を処刑した報復として、明国が奴兒哈赤の使者を殺害したこと

第五の恨み 明は国境近くで耕作していた満洲の民を脅迫して、追いはらつた

第六の恨み 明は悪辣なイエヘ部を利用して、奴兒哈赤等への戦争をけしかけた

第七の恨み 明は天の公平な裁きを犯し、善を悪、悪を善としたこと

これらを見ていくと、奴兒哈赤等にとつての懸案事項が、主に国境問題とイエヘ部との関係であったことがわかる。

やがて側近が奴兒哈赤の前に大きな木箱をさしだし、奴兒哈赤が中央に開いた穴に手をいれ、一枚の紙きれをとりだした。

「これが汝に与えられた運命だ。汝にこの文字が読めるであらう」
そこには大きく『火』と書かれていた。

「助けてください。命ばかりはどうか！」

明国の密偵は地に両膝をつき命ごいしたが、許されることはなく、兵士が両脇をかかえ近くにあつた大木に無理矢理縛りあげた。やがて柴に火がつけられる。狂氣ともとれる悲鳴があがり、見守る側近等の中には目をそむける者もいたが、奴兒哈赤は眉一つ動かすこと

はなかつた。

天への誓いの儀式も終わり、間もなく座は宴席となつた。

奴児哈赤も酒を口にし、したたかに酔いが回りはじめた頃、

「どうじゃ、そなた座興に舞いでも演じぬか」

と、かたわらに控える側室でドルゴンの生母にもあたる鳥拉納喇ウリナラ氏に、やや充血した目で語りかけた。

鳥拉納喇氏は名を阿巴亥アバイという。海西女眞の鳥拉部の出自で三十一歳である。切れ長の目はドルゴンとよく似ている。わずかだが武術もできる。旗袍に身を包み、居並ぶ将兵達も前で一礼すると剣を片手にする。白刃が月の光を吸収した。猫のようにしなやかで、しかも豹のように素早い身のこなしに、将兵達の目は釘づけとなつた。奴児哈赤はじつと様子を見守つっていた。見事な剣舞ではあるが、なにか物足りなさを感じてもいた。

「ホンタイジよ汝舞いの相手をせい」

と奴児哈赤は今度は自らの八男で、後継者候補でもあるホンタイジに剣舞を命じた。

ちなみに奴児哈赤には十六人の男児があり、ドルゴンは十四男にある。草原の民の社会において極めて特徴的なことは、長子相続性というものがなく、実力あるものが部族の長になるという暗黙のルールが存在することである。豊かな農耕民族社会と異なり、狩猟民族は常に厳しい自然環境にさらされ、凡庸なものでは例え年長者であろうと一族の長はつとまらないのである。

そうした中ホンタイジは生まれつき聰明で、奴児哈赤も一目置いていた。とはいえ、後に奴児哈赤の後継となるこの人物は二十七歳とまだ若く、後年のようにざつしりとした安定感はなく、いかにも若武者といった風格だけを漂わせていた。

ホンタイジは鳥拉納喇氏と剣を交えはじめる。むろん相手は女である。適当に相手をして座興の席を盛り上げるつもりでいた。ところ

ろが誤つてホンタイジの剣が、鳥拉納喇氏の髪の結び目をほどいてしまつた。艶やかな髪が風になびく。生まれつき気性の荒い鳥拉納喇氏は、瞬時にして刺激され、剣の動作が早くなつた。ホンタイジは防戦に終始することとなる。

「妃、たいがいになさるがよろしい」

鳥拉納喇氏の剣を力で無理やり抑えこんだホンタイジは、耳元で小声でささやいた。だが鳥拉納喇氏は聞こうとしなかつた。ついにはホンタイジは剣を真つ二つにされてしまう。

「己！」

かすかに微笑えうかべながら剣を喉元につきつけてくる鳥拉納喇氏に、ホンタイジは少々むきになつた表情をうかべた。あわや一瞬即発かといつ時、一部始終を見守つていた奴児哈赤が拍手し、満座の諸将もつられて拍手を送り座興の剣舞は締めくられた。だがホンタイジは以後、鳥拉納喇氏に対して複雑な感情を持つこととなるのである。

この時すでに明の主力軍約十萬は、四手に分かれて後金の都ヘトウアラを目指していた。奴児哈赤もまた決戦を覚悟で八旗に動員令をくだした。決戦といつても、後金側の兵力は一万ほどでしかない。多くの人々が見守る中にあり、ドルゴンと母鳥拉納喇氏の姿もあつた。

「父上」

七歳になつたドルゴンが、不意に軍の先頭をいく奴児哈赤を呼んだ。奴児哈赤は馬足を止める。

「父上、私も戦に赴きとうござります」

奴児哈赤はしばしドルゴンを馬上からじつと見つめた。むろんまだ七歳のドルゴンが戦闘に参加できるわけがない。ドルゴンは仏像のようになり鼻立ちが整い、生まれつき利発だった。奴児哈赤も多くの諸氏の中でも、ドルゴンの成長を楽しみにしていた。

「ドルゴンよ、父はほどなく死ぬかもしけぬ」

奴児哈赤は本格的な明との会戦を前に不吉なことをいった。

「なれど我例え死すとも、魂は一羽の鷹となつてそなたのもとへ戻るであろう。汝生きて祖国を守れ。汝には生まれながらにして、菩薩の加護があること決して忘れるでないぞ」

そこまで言つと、奴児哈赤は鳥拉納喇氏の方角をみた。

「どうかご無事で、天命の加護がありますよう」

鳥拉納喇氏は両手を合わせていつたが、奴児哈赤は言葉を返すことはなかつた。ドルゴンはいつまでも父の背を見送つた。すでに明清興廢をかけたサルフの合戦は、目前に迫つていたのである。

サルフの大会戦（一）

女真族は主に狩猟を正業とする民族である。女真族の狩猟は、あらかじめ獲物を追いこむ場所を決め黄色い旗を立て、赤・白・藍の旗の部隊が少しずつ包囲を狭める巻き狩りが主流として行われた。やがて四旗は女真族の軍団編成にとり最も重要な単位となる。

奴兒哈赤は汗に即位した後、四旗にさらに？黄・？白・？紅・？藍の四旗を加え、あわせて八旗とした。八旗のうち汗である奴兒哈赤自身は正黃と？黃の二旗を掌握し、他の六旗のうち正白と？白は奴兒哈赤の八男ホンタイジが、正紅と？紅は次男のダイシャンが、三男のマングルタイが正藍を、最後に？藍を奴兒哈赤の甥にあたるアミンが掌握した。

奴兒哈赤にとり天命四年（一六一九）は、イエヘ部族への征討戦から始まつた。だが同じ頃明朝側は動きだしていた。奴兒哈赤の首に一万両の懸賞金を懸け、かつて豊臣秀吉の朝鮮出兵のおり、加藤清正の籠もる蔚山城の攻城戦でも重要な役割を果たした楊鎬を大将とし、四路より十万の大軍をもつて後金の領土を目指していたのである。

天命四年の一月といえば、新暦でいうと四月にあたる。海を隔てた日本では春うららかな季節にあたるが、遼東では凍てつくような寒波の時期である。一寸先の視界も定かならぬ吹雪の中、明の大軍が吐く息も白く、人馬とともに雪の中に半身をつかりながら行軍する姿があつた。

四路に分かれた軍勢のうち、主力の部隊を率いる将は総兵官杜松という者である。杜松の部隊約三万は撫順関から、両軍決戦の地となるサルフ山を経てヘトゥアラを目指す計画をたてていた。

杜松の部隊の南には清河といわれる河を通過して、ヤフ関を経てヘトゥアラを目指す一万の軍勢の姿があつた。この部隊を率いる者

は李如柏という将である。李如柏もまた秀吉の朝鮮出兵の際、碧蹄館で立花宗茂等の軍と戦つた経歴をもつていた。

杜松・李如柏の部隊が西の方角からヘトウアラを田指したのに對し、北部方面の靖安堡からサルフを経て進入を計ろうとする部隊が、総兵官馬林率いる一万の軍勢だった。馬林の軍勢には奴兒哈赤等の宿敵イエへ部族の兵一万が友軍として参陣している。

最後に南の方角すなわち寛奠を経由して涼馬佃からヘトウアラを目指すのが総兵官劉？率いる一万の軍で、劉？の部隊には李氏朝鮮王朝の援軍一万も参加していた。劉？なる武人は、李如柏・楊鎬同様やはり日本軍と戦つた経歴があり、朝鮮の李舜臣とともに小西行长の順天城を攻めたこともあつた。朝鮮王朝の軍が参陣したのは、もちろん文禄・慶長の役のおりの明の援軍に対して報いる意味合いが強い。

さて奴兒哈赤はイエへの領内に侵入して一、三の小城を落としたが、明軍動くの報に接し急ぎ馬首をかえし、先発部隊のダイシャンに命じ、サルフ並びにジャイファーンの両山へ砦を築かせた。明の主力部隊を率いる杜松にとり、後金軍の動きが気がかりでならない。「恐れながら他の部隊の到着を待つてから動くべきではござらぬか。今はみだりに兵を動かすべきではござらぬ」

側近がはやる杜松をたしなめた。杜松が撫順關からの単独出撃を主張し始めたからである。側近等は口をそろえて反対した。

「やかましわ己等、敵が眼の前で砦を築いて万全の備えをとろうと、いうに、指をくわえて座視するという軍法がどこにあるか。たがか女真の兵ごとき、わし一人で十分じゃ」

杜松は知恵もあり、勇氣もあり胆力もある。ただ血氣にはやるとこがあり、陣中でも平氣で大酒を飲んだ。酒が入ると杜松は誰の意見にも耳を貸さなくなり、自らの作戦に異をとなえる者に平氣で刀をむけた。すでに杜松は相当な酒がはいつていて、側近等は杜松をいさめるこの不可能をさとらざるをえなかつた。

二月二十九日夜半、杜松は他の部隊と連絡を取ることもなく、ついに三万一千の軍勢をもつて撫順関を出撃する。杜松自ら率いる部隊は一万、嚴寒の闇の中三十五キロにも及ぶ強行軍だった。残余の兵約一万は、重兵器や弾薬、糧食を擁し、主力より半日遅れての撫順出撃だった。

三月一日には早くもフン河に達したが、すでに部隊の大半は疲労の色が濃くなっていた。しかも休むことなく冬季の渡河作戦という難題が待ちかまえた。ちょうど河は解氷期にはいつており、人馬ともに渡河は容易ではない。多くの兵が溺れ死ぬ中、泥酔した杜松には將兵達の疲弊など眼中になかったのである。

後陣の奴兒哈赤のもとには偵察部隊を通じて、明軍の動きが逐一報告される。三月一日の未明には、撫順方面の偵察部隊から、明兵とおぼしき篝火が多数移動しているという報がもたらされた。さらに時を経ることなく明軍がサルフ山を占拠したという報せがはいつた。サルフ山の後金軍は大半は戦闘員ではなく、明軍に対して若干の抵抗はしたもの、ついにはジャイファイアン山に後退したのである。だがジャイファイアン山でも明側の攻勢を支えきれず、ジャイファイアン山の東に接するチリンハダの崖まで撤退したという。

明の杜松の軍勢はサルフ山を占拠した後、三手に分かれて作戦を継続中だった。すなわち、杜松自ら自らが指揮する一万はチリンハダを囲み、火器を装備した一万はチリンハダと川を隔てたサルフの山上に残り、約一万の輸送隊はその西方にあるという。

杜松の軍勢の動きに先だって、奴兒哈赤のもとには南路から迫る劉？と朝鮮の連合軍の動きもたらされていた。

「ホンタイジよ、明の軍勢は西と南から我らを挾撃する腹と見えた。いかにして敵を防ぐべきとおもつか？」

と奴兒哈赤は、かたわらに控えるホンタイジにたずねた。

「されば南からの明兵は、おそらく我等を牽制しようとするものでござりましよう。それに対しては既に派遣してある五百の我が兵で十分かと。撫順関から来る西の大軍こそ敵の主力でござります。まづこれに当たることが急務かと」

ホンタイジの言葉に奴兒哈赤は深くうなづいた。

「いかにも、西軍こそ我らにとつて最大の敵である。我ら然るべき後に西軍を撃破すれば、他路の敵は恐るものではない。みだりに兵を分散させるこそ下策」

奴兒哈赤はただちに、アミン、マングルタイ、ホンタイジの諸王子に出撃を命じた。わずか数百の非戦闘員をヘトウアラ城に残しての後金軍総力をあげての出撃だった。

撫順方面へのルートを急ぐ奴兒哈赤のもとへ、不意に一羽の鷹が急降下しまい降りた。遼東には海東青という珍しい鷹が生息している。奇妙なことに奴兒哈赤の肩に止まつた海東青は紅にくちばしを染め、赤く染まつた腕輪らしきものをくわえていた。紅は奴兒哈赤の次男ダイシャンの？紅の旗を意味する。すなわち天空から飛来した海東青はダイシャンが奴兒哈赤のもとへ託したもので、血に染まつた腕輪は、明軍の猛攻にさらされたダイシャンの奴兒哈赤に対する訣別を意味していた。

奴兒哈赤はしばし沈黙した後、一本の矢を鷹のくちばしにはさみ天へと帰した。いわば奴兒哈赤流のダイシャンへの返答であり、戦つて死することこそ本懐とせよという意味をこめていた。

鷹は風のようにダイシャンの陣へ戻り、奴兒哈赤の意を伝えた。

奴兒哈赤の矢を受け取つたダイシャンは実によく力戦奮闘し、さしも歴戦の将杜松をもつてしても攻めあぐねた。

奴兒哈赤の行動は敏速だつた。わずか六時間で五十キロを走破する神業に近い行軍速度で、日没前にはサルフ山を望見するグレの野に到達した。むろん全軍騎兵からなる後金軍だからこそなしえたものだった。

「さて、敵は三手にわかれている。汝はいすれから攻めるが得策と思うかマングルタイよ」

と奴兒哈赤は、今度は三男で正藍旗を預かるマングルタイに尋ねた。

「さればチリンハダの味方が苦戦しております。敵将杜松は攻囲軍の中にはありますれば、まずこれを破るために全力をつくすべきかと」

「それもよからう。なれどわしは、こたびの戦サルフを制する者が勝ちを制すると考えておる。恐らく敵はまだ我等の到着を知らずにいるだろう。最も恐るべきは敵の火器じや、敵が火器の配備を完了する前に、我等迅速にサルフの敵を叩くが肝要」

さすがに歴戦の將奴兒哈赤の言は強い説得力があった。奴兒哈赤は各王子達に率いられた主力部隊とともにサルフ山を目指す。日没の一時間前、薄明かりの中、ついに後金軍はサルフ山に到達した。

「全軍突撃！」

奴兒哈赤の号令とともに、開戦を告げる銅鑼や太鼓がサルフ山に響きわたつた。

「嘘であろう……？」

チリンバタ山で、突如サルフ山に出現した後金主力部隊に、杜松は動搖を隠せなかつた。大將不在のサルフの明軍の混乱は、さらに想像を絶していた。明軍の不幸は、ようやく配備された大砲や鉄砲などの火器が、小雨のため使用できなかつたことだつた。この戦いの模様を後金側の史書は、

『五旗の兵が稻妻のようにサルフに進出し、敵の陣に砲、小銃を幾重にも並べられ待ち受けていたのにも拘らず、少しもためらわず全く止まることなく進み、山頂に到るや否や、遮一無二突撃し瞬時にして皆殺しにし、山はたちまちのうちに血で赤く染まつた』
と後金側の電撃作戦を伝えている。

サルフ山を巡る攻防は後金軍の圧勝で幕を閉じた。勢いにのつた奴兜哈赤等五旗の部隊はフン川を渡り、ジャイファイ山の杜松軍の背後を突いた。さらにすでにジャイファイ山に進出して二旗の部隊も、フン川の支流蘇子河を渡河し、杜松軍の側面を突く。さらに今まで劣勢を余儀なくされていたダイシャンの部隊も攻めかかり、ここに後金側の包囲が完了した。

この非常事態の中であつても、明将杜松の鬪争心は衰えることをしない。すでに死を覚悟した杜松は末期の酒を樽ごと飲みほし、槍ではなく巨大な鉄槌をもつて群がる後金軍に応戦し、鉄槌が使えなくなるや、素手で応戦した。さしも後金軍も杜松の気迫の前に押されはじめる。この時川を背にし、栗毛も鮮やかな通常より巨大な馬にまたがつた将が杜松めがけて弓を構えた。ダイシャンだつた。

「父上より託された矢受けてみよ」

ダイシャンの放つた一撃は、見事杜松の額を貫通した。杜松の死に明軍の全軍が崩壊するまで時はかからなかつた。

戦後奴兜哈赤は敵将杜松の死体を改めて見聞した。

「この者は最後まで勇猛だったと聞く。敵の勇者への敬意だ丁重に葬るがよい」

草原の民は常に勇ある者に敬意を表するのが慣わしである。奴兜哈赤もまた、杜松の骸に一時手をあわせた。だが天下分け目のサルフの合戦が終焉をむかえたわけではない。北路・南路・西路の三方より新たな明軍がヘトウアラ日指して進出しつつあつたのである。

サルフの大会戦（一）

さて、明軍総大将楊鎬と右翼南路軍大將劉？は途中フチャと
いう場所で軍勢に小休止を命じていた。そこへ伝令が慌しくかけこ
んできて一大事を伝えた。

「なんと、杜松が死んだ」

サルフでの味方の部隊の総崩れの報に、しばし楊鎬は茫然自失の
体となつた。

「三万もの軍勢が一日の戦闘で消滅するとは、敵は想像以上に手強
い。ひきかえ我等の損害は大きい。ここは一日兵を引き上げるべき
かもしれん」

すでに老齢の楊鎬は思わず弱気の言葉をもらした。

「待たれよ、いかに主力部隊が壊滅したとはいえ、ここで一戦もせ
ず兵を退くは陛下に対し、不忠とは思われんのか」

と真つ先に反論したのは総兵官劉？だつた。両者は以前から馬が
合わず、軍議の席で対立することもしばしばだつた。

「まずは拙者に全てを任せていただきたい。この劉？雲南・四川で
の反乱を鎮圧したこともあれば、朝鮮で倭国の軍勢と戦つた経験も
ある。戦の駆け引きに及んでは、奴兒哈赤なる者等に決して後れを
とることはない」

「なにを申すかと思つたら、汝は朝鮮での戦のおりは敵の小西とか
申す者に買収され、突如撤兵したと聞いたが相違ないか」

この軍議には友軍としてかけつけた朝鮮の將軍達も多数列席して
いた。彼らの前で面目を失い、劉？は顔色を変え、

「なんと、貴殿こそ倭国の加藤清正が守る、まだ建設途上の城さえ
攻め落とすことができず、しかも敗戦を勝利と偽つて投獄されたこ
と、よもやお忘れではあるまいな」

と反撃した。楊鎬もまた血相をかえ、

「己、許せん」

と剣をぬいた。楊鎬が刀をぬくと劉？も剣をぬき、あわや一瞬即発というところで朝鮮の將軍達までもが割つて入り、ようやく事なきをえる。だが楊鎬はやはり大軍を率いる器ではなかつた。明側の足並みの乱れは、奴兒哈赤等につけいる隙を与えることとなるのである。

一方總兵官馬林に率いられた北部方面軍二万とイエへの援軍一万は、開原を出発して後金の領内に侵入。三月一日にはシャンギヤン崖といふところまで達したが、こちらもサルフでの敗戦がすでに伝わつており、士氣は低下する一方だつた。

明軍現るの報は、ただちにダイシャンの知るところとなる。馬林の兵は小高い山の上に三重の濠をもうけ、その外側に鐵砲・大砲などを配備し待ちかまえているといふ。直ちに伝令が奴兒哈赤のもとへ走る。奴兒哈赤は敵の布陣を冷静に觀望し、近くの明軍を見下ろすことができる山を占領し、そこから敵の本隊へ攻めくだるという作戦を立てた。むろん明軍を黙つてゐるわけがなく、ダイシャン率いる一旗の部隊と激戦を展開した。明軍はさかんに火器をもつて応戦するも、援軍として他の六旗もかけつけると、ついに支えきれず馬林自身も逃走した。

馬林の軍勢をけちらした奴兒哈赤は、そこから西へ一キロのフィエフン山へ進出する。そこには明の残兵一万の姿があつたが、こゝでも奴兒哈赤の作戦が功を奏する。さかんに火器で応戦する明兵に対し、後金側では兵を三段にわける。第一陣は重厚な鎧に槍・刀を持つた部隊で、第一陣は薄手の鎧に槍・刀の部隊、そして最後尾に騎馬を主体とする部隊が続く。まず歩兵部隊が敵の火力を排除した後、騎馬の部隊が突撃を敢行するわけである。

作戦は成功し、ここでも明軍とイエへの援軍は壊滅した。後金軍は大戦に一日続けて快勝した。

杜松の部隊に続き、馬林率いる左翼北路軍も壊滅したという報せ

は、総大将楊鎬をして戦意を喪失させることとなつた。楊鎬はたちに残存部隊に総撤収を命じる。李如柏率いる右翼中路軍は、たちに引き上げに応じたものの、すでに劉？率いる一隊は楊鎬の命令を無視して敵地奥深くへと潜入していた。まさに奴兒哈赤の思うつぽだつた。

奴兒哈赤の甥にあたるアミンはワルカシといつ場所で劉？の部隊と遭遇。全軍を物陰に伏せてやり過ごした。再び伝令がダイシャンのもとへ走つた。劉？もまたダイシャンの軍に気付き、近くのアフダリ山という山の頂で総攻撃の体制を整える。

一方ダイシャンはアミンそしてホンタイジと協議の上、山を三方から包囲し、夜襲をかけるてはずを整えた。

アミンの部隊は北方の厳しい寒気が肌を刺激する夜明け前、息を殺して山の頂を目指す。アミンもまた勇猛をもつて知られた後金の若き武者である。ところがここに想定外の難題が待ちかまえていた。

「将軍一大事にござりまする」

先発していた物見が、息を切らしながらアミンの馬の前で平伏した。

「我等の行く手を巨石が阻み、進軍するには不可能でござる」

果たして巨石は、アミンをあざ笑うかのように立ちふさがつていた。

「うぬ今回の作戦は他の二軍と息があわねば成功はおぼつかない。我等ここで足止めをくつてはいる余裕などない」というに」

アミンが困惑していると、突如として大雨が降りだし雷光が暫時天をさいた。不意に後金の兵士達の間から驚きの声があがつた。

「見ろ龍だ！ 龍が天を移動していくぞ！」

アミンが見上げた天空の先に、まぎれもなく一匹の龍が眼光をいからせていた。アミンは不意に兵士達に後方にさがるよう命じた。そして剣をぬくと天に祈つた。

「軍神よ、どうか我に加護を」

しばし祈ると、不意に凄まじい勢いで落雷が眼前を阻む巨石を直撃した。岩は粉々に砕け散り、明軍が待ちかまえる山頂へと続く道がアミンの前に開けた。

「者共進め！」

驚くべき奇跡に、後金の兵卒達は勇を奮いおこされ、怒濤のよう

に山頂の劉？の部隊に殺到する。

「恐れながら、背後に敵襲！」

物見が慌しく大事を報せる頃には、劉？はまだ夢覚めやらぬ中にあつた。

「恐れながら、西の方角からも敵襲にござりまする」

明軍はただちに火器をもつて応戦しようとするも、おりからの雨で役にたたない。夜が明けきる頃には大勢はほぼ決していた。劉？は乱戦の最中討ち死にした。

自軍が壊滅したことを後続の部隊は、まだ知らずにいた。約二万の明・朝鮮の連合軍は富車フチヤという場所にあつた。時を経ることなくダイシャンの部隊が殺到する。だが明軍がほこる火器の前に後金の騎兵は機動力を封じられ、次第に苦戦を余儀なくされる。特に後金軍を苦しめたのが仏郎機砲フランキといわれる、ポルトガル製の大砲だった。仮郎機砲は鉄製で、長さ五、六尺（一尺約三十一センチ）ほどである。

仮郎機砲が従来の中国の大砲と比べ優れている点は、まず母銃と子銃を組み合わせることによって、母銃の大きさによる射程の長さや勢いと、子銃の詰め替えによる発射間隔の短さを共に実現したことにある。また砲筒の壁が厚く、発射時の圧力に耐えうる安全性を持ち、さらに照準具が備えてあり命中率が高い。木架に取り付けて射角を調整できるなどであつた。

仮郎機砲が炸裂するたび馬は叫びをあげ地に付し、あれいは前足を蹴りあげ後金兵を振り落とした。

ところが奇跡は再びおこつた。突如として凄まじい突風がおこり、

砂塵が一寸先の視界をゼロにした。戦場は瞬時昼であるのか夜であるのかさえ定かならぬ様相をていしたのである。ダイシャンはむしろ、ここを好機と判断した。

「今ぞかかるい！」

体制を立てなおした後金騎兵は、瞬時にして、まるで疾風迅雷のように敵の陣に殺到する。明側の陣はこの異変に次から次へと破られ、砂塵が止む頃には大勢は決していたといつていい。明軍は雲散霧消したのである。

すでに後続の李氏朝鮮の部隊に戦意はなく、降伏した後ヘトウアラに護送される。一いつじて世にいうサルフ戦役は後金側の圧勝で幕を閉じた。

この合戦における奴兒哈赤の戦略は極めて的確で、敵の戦力を分散しての各個撃破の典型例として、今日なお欧米の士官学校等で教材となるほどである。一方明側は各将がそれぞれ全く連携がとれておらず、いわば敗れるべきして敗れたというべきであろう。奴兒哈赤の目は戦勝の後、遼東の沃野へと見開かれるのである。

奴兒哈赤に率いられた後金の部隊はサルフ戦役を終えた後も、勢いとどまるることを知らなかつた。六月には開原に進出し、サルフ戦ではかるうじて命を拾つた明将馬林を滅ぼす。そして貴金属・衣服・家畜等おびただしい数の戦利品が後金の都ヘトゥアラにもたらされることになる。

だが奴兒哈赤は一方で、ヘトゥアラからサルフ戦役の激戦の地でもあるジャイフイヤンへの遷都を計画していた。ジャイフイヤンは渾河と蘇子河の合流点に位置し、最高地点三四六メートルと、さして高くもない現在鉄背山といわれる山の頂にあつた。ただし南北両面は崖となつており、防御には好都合ともいえるだろう。現在城壁の一部、烽火台、点将台が残つてゐる。

遷都の後も奴兒哈赤は休むことを知らない。七月には明の領内で開原から南へ三十キロほどの鉄嶺へ進出し、かつての遼東總兵李成梁一族の本拠地に打撃を与える。さらに八月には、奴兒哈赤の全女性統一の前に立ちはだかる最終の敵、イエへ征討にふみきるのである。

イエへの本拠地は現在の吉林省梨樹県にあつた。東西二城を拠点とし、そのうち西城はナリムブルという者を主とする城である。『万曆武功錄』という明側の資料は西城の構造について、『ナリムブルの城は全部で四重の城壁があつて、他に木の柵があつた。

平地には石で築かれた外城があり、外城の内と外には木の城壁と柵が作られ、これら城壁は三重の壕により囲まれていた。外城の中央には切り立つた山があつて、その上に石造の内城壁（城壁の全長約八百五十メートル）が築かれており、その中にも木の城壁が一重存在した。そして木城の内部には極めて特徴的な八角形の望楼が存在した』と記している。

一方東城はブヤングという者を主とする城で、西城から東へ約一キロ、広大な平地の中につて二メートルほど隆起した台地の上に築かれていた。城壁の全長約九百メートル、城門が一箇所あり、翁城の設備も存在したらし。

天命四年（一六一九）八月二十一日、奴兒哈赤率いる後金軍はギンタイシの籠もる西城を大軍でもつて包囲した。降伏を勧告したが、ギンタイシは頑として応じなかつたので、ついに両軍決戦となつた。後金軍は鉄製の鎧・兜の上に厚い木綿の防具を装着した兵が先兵となり、薄い鎧を着た兵が後に続き山頂を目指す。一方守備側の兵士達も必死である。弓矢はむろんのこと、丸太や火のついた薪束さらには巨石とありとあらゆるものが攻撃手段として動員される。だが兵力の差はいかんともしがたい。

未明攻防が始まり、昼過ぎには守将ギンタイシは最早これまでと、家族とわずかな兵とともに高台にある八角楼に向かつた。自ら弓を引き後金兵數名を倒したが、埒があかずとみて建物に火を放つ。しかし死にきれなかつた。焼けどを負い姿を現したところを捕らえられ、ほどなく絞殺されたのである。

一方東城は「ホンタイジやダイシャン」に率いられた精銳部隊が攻めかかるも、城はなかなか落ちない。だが西城が落ちたという報が流れる、城将ブヤングをはじめとして將兵の多くが意氣消沈し、ついには降伏を申し出る。ブヤングは奴兒哈赤の前に出頭したものの片膝をたてたままで叩頭もしない。焼酎の杯を与えたが口を近づけただけで飲みほそうともしなかつた。奴兒哈赤は一命を助けるつもりでいたが、ついに処刑を決意した。ブヤングもまた絞首刑となつたのである。こうして奴兒哈赤等の悲願であつた全満州族の統一は、ついに達成されたのであつた。

天命五年（一六二〇）春になり、奴兒哈赤は突如として再遷都す

る。場所はサルフである。そして翌天命六年（一六一一）には一気に瀋陽まで攻め上がり、なんと一日にして制圧。余勢をかつて瀋陽をもわざか一日の戦闘でもつて武力制圧する。結果河東の七十あまりの城が、戦わずして奴兒哈赤の軍門に降つた。まことに奴兒哈赤の鬼謀は神業といつてよい。そして瀋陽を陥落させると、あつさりとサルフを捨てましても、この地に遷都する。だがなおあきたらず、瀋陽から太子河を挟んだ地に東京という地に、新たな都の建設にとりかかる。天命七年（一六一一）一月のことだった。

東京城はサルフや瀋陽等の後金の都がいすれも、いわば山城だったのに対し、初めて都市をすっぽりと飲みこむ形の城塞都市であつたということで興味深い。平地に隆起した丘の上に築かれ、高度差は最大でも四十メートルほどしかなかつた。都市構造としては完璧な方形ではなく菱形に近く、城壁は全長約九百メートル、高さ約六メートルほど。東西南北に一つずつハつの門があり、それぞれ内治・撫近・懷遠・外攘・德盛・天祐・福勝・地載と名づけられていた。

ヘトウアラからジャイフィイヤン、サルフ、瀋陽、そして東京へ、遷都を繰り返す間、奴兒哈赤は後金の後の世の姿を脳裏に思い描いていたであろうことは想像に難くない。だが奴兒哈赤の苦悩は他にあつた。

ようやく完成したばかりの東京の都城で、奴兒哈赤は久方ぶりにドルゴンの生母鳥拉納喇氏こと阿巴亥と闇を共にした。両者は約二メートルほどのオンドルの上で長い夜を過ごしていたが、やがて奴兒哈赤は馬乗りになつた阿巴亥相手に行爲に及ぼうとし、苦しそうに息をした。

「今日は気がのらぬ。そなたは下がれ」

不意に立ち上がつた奴兒哈赤は不機嫌そうにいった。辯髪が激しく乱れていた。無理もないことである。一代の英傑もすでに六十三、

性的能力は限界に近づいていたのである。阿巴亥はなんと言葉をかけてよいかわからず、奴兒哈赤の背にしなだれかかった。だが奴兒哈赤はすぐにそれを払いのけた。阿巴亥は無言のまま部屋を後にす。今がまさに女盛りの阿巴亥にとり、老いた奴兒哈赤以外に性的対象がない宮廷生活は、あまりに空しい日々でしかなかつた。

奴兒哈赤はすでに年老いたが、奴兒哈赤の後継者となる後金国の将来の担い手達は、健全に成長しつつあつた。

十歳になつたドルゴンは天空を飛来する鳥達の群れをあくことなく見つめていた。

『鳥達の世界には国境という概念はない。何故人は狭い土地をめぐつて争うのか』

ある日ドルゴンは疑問を母阿巴亥に問うてみた。阿巴亥は答えることができなかつた。当時後金は隆盛期にあつたとはいえ、まだ小国に過ぎず、万里の長城の彼方には他を全ての飲み尽くすかの』とき大國明があつた。またモンゴル・朝鮮もまた後金国を挟むようにして成り立ち、さらに明国より南には、ビルマやチベット等後に後金と密接なつながりを持つ国も存在した。時あたかも西欧諸国も、そろそろアジアに関心を持ち始めた時分である。幼いドルゴンはまだ自分が、この広大な世界の一つの点にすぎないことを知らずにいた。

幼いドルゴンの遊び友達に豪格ホーゲという者がいた。豪格の父は奴兒哈赤の八男ホンタイジである。つまり豪格はドルゴンにとつて甥っ子ということになる。だが兄弟といつてもホンタイジとドルゴンでは二十も歳が違い、甥であるはずの豪格はドルゴンより三つ年上であつた。

ある日ドルゴンと豪格は近隣の年少者を集め、それぞれが大将となり雪合戦をおこなう。たまたま豪格の父ホンタイジが馬で側を通りかかり、丘の上から側近とともに観戦した。

「若君の側が優勢にいざりまするな。敵の部隊はこのままでは合戦でいうと総崩れといったところだ」さこましょうか

側近が興味深く様子をうかがいながら「うとホンタイジは、

「いや、あれをよく見ろ」

ホンタイジが指さす方角に側近が田をやると、ちょうど左右に雪が隆起してできた巨大な壁があり、背後に少年達が隠れていた。やがてドルゴン側の少年達が逃げこんでくるや伏兵（？）が出現し、豪格の子分達を挾撃する。豪格はややむきになつたのか声をはりあげ味方を叱咤し、ほどなくドルゴン側の少年達は再び逃げ出した。ところがまたしても罠があつた。なんと落とし穴である。豪格自身も穴に落ちたところを上から雪玉を畳み、あられと落とせられるはめとなつた。

「遊びとはいえ、若様にあの仕打ち許せませぬ

側近が愚痴をいうとホンタイジは、

「いや、しょせん子供同士のこと我等の出る幕ではない。それよりあのドルゴンとか申すもの知恵があるわい。ゆくゆく役に立つかもしれぬ。それにひきかえ我が息子は、愚かとまではいわぬが、ちと単純にすぎるかもしれぬ」

ドルゴンは父奴児哈赤に年少ながら才氣を愛され、一田も一田も置かれていた。ホンタイジもドルゴンが只者でないことをうつすらながら悟つた。同時に複雑な心境を抱かざるをえなかつた。年齢に差があるとはいえ、ドルゴンがやがて成長すれば、後継者を巡る自らの立派な競争相手である。ゆくゆく争わねばならぬかもしれぬ。

両者の間の奇妙な宿命がすでに始まつていた。

ドルゴンには一つ年下の弟がいた。名を多鐸といつ。多鐸には兄弟のように親しい遊び相手がいる。名をウランといつた。ウランは捨て子である。鳥拉納喇氏に拾われ、将来侍女となるべく養育された女性だった。年はウランの方が三つ上だった。

「帽子を返して！」

ウランが悲鳴にも似た声をあげる。

「嫌だね！」

両者は今日もまた夕暮れ時まで馬でかけ続け、暗くなる頃、草わらで唇をかわしていた。むろんたわむれごとに近い恋である。ただ肉親の情愛の薄いウランは、どこか早熟なところがあつた。唇を吸われた多鐸は頬を真っ赤に染め、

「姉……」

と、何事かをいおうとしたが言葉がとぎれた。

ちょうど春浅い日のことである。ふとウランが気がつくと、目の前に氷のはつた小さな池があり、ウランが今まで見たこともない一輪の花が咲いていた。ウランは池に足を踏み入れた。

「危ないよ！」

多鐸が叫んだ時は遅かった。薄くはつていた氷はたちまちのうちにひび割れ、ウランは水中で必死にあがくはめとなつた。不幸にして多鐸は泳げない。助けを求めるに近くの村まで必死に走る途中、たまたま豪格と出会い、からうじてウランは豪格によって救助された。ウランはこの一件により豪格に淡い恋心をいだくと同時に、多鐸に對しては自分を見捨てたものと思い、以後心通わす機会が少なくなつた。

一月、二月ほどたむ、ウランは多鐸に復讐する。ある日ドルゴンと多鐸が馬でかけ比べをすることとなつた時のことである。ウランは多鐸にわざと気性の荒い暴れ馬に乗るようすすめ、疑念を抱かず馬に鞭をいた多鐸は、ほどなくふりおろされ腰を強打し失神するはめとなつた。さしたる負傷ではなかつたものの、心に受けた傷のほうがおおきく、以後、多鐸は内気な青年として成長していくこととなるのである。

天命七年という年、奴兒哈赤は遼陽と並ぶ遼東地方の拠点都市広

寧の攻略に明けくれた。八旗の主はいづれも奴兜赤に従軍したが、ただホンタイジのみは軽い病を患い城での留守となつた。

さて病も快方に向かい始めたある日ホンタイジは気晴らしのため、夜半馬で一人周囲を散策し、湖のほとりで奇妙な光景を目撃することとなる。鏡のように澄んだ湖面に人影らしきものを見たのである。

「気のせいか？まだ病が完全に癒えではおらぬようだな」

ホンタイジは思いなおして馬首を返そうとした。ところが、不意に朦朧とした暗雲の間からかすかに月の光がのぞき、水面にうかんだ一人の夫人の顔を照らしだした。瞬時ホンタイジは湖に一輪のすみれの花が咲き、夜の精がそこに生命を宿そうとしているかのような錯覚を覚えた。

「あれは妃ではないか」

しばし目を凝らしたホンタイジは思わず驚嘆の声をあげた。夫人は上半身一つもまとわぬ体にして、湖面を飛魚のように自由に遊泳していた。それはまぎれもなく阿巳亥だつた。

やがて湖から陸にあがつた阿巳亥は、馬上自らを見下ろす、筋骨隆々たる武人らしき影に気付き瞬時にして蒼白となる。本能的に胸を手でおおつた。ホンタイジは貂の毛皮を阿巳亥に向かつてほうり投げた。

「妾とはいえ、父上の留守を守る身がかよくなところで、しかもかような出で立ちで、一体これは何事か」

ホンタイジは静かに、だが冷厳に語りかけた。

「今私は籠の鳥も同然、なれどせめて今宵一夜たりとも、己が気のおもむくままふるまつてみたかった」

阿巳亥の声は重く苦しかつた。

「不覚にもかよくな姿を見られてしまい、恥辱をこいつむるはめになつた以上、もはや生きてはいけぬ。かよくな浅ましき我が身を成敗するがよい」

ホンタイジはしばし困惑した。果たして真に死を覚悟しているのか、真だとしても今ここで阿巳亥を自らの手で成敗するわけにもいかない。やはりこの不始末は父奴児哈赤に委ねるべきであろう。だがふと瞬時のことである、水に濡れ夜霧に浮かぶ阿巳亥の痴態がホンタイジの情欲を強く刺激した。剣をぬき阿巳亥の自由を奪つたホンタイジは、不覚にも本能が命じるままの行動をとる。ホンタイジが犯した一夜限りの過ちだった。阿巳亥は最初驚きとamp;gt;より放心状態となり、やがて抗うことなく身を委ねた。雲間からくつきりと姿を現した満月だけが、闇夜の信じがたい光景の目撃者となつた。

目を中原の明王朝に転じてみたいと思う。

明の国都北京は、十世紀契丹族の遼の五京の一つになつて以降、今日に至るまで続く千年の都である。遼が滅んだ後、元の時代には大都と呼ばれ、明の国都は建国当初南京に置かれたが、三代皇帝永楽帝により遷都され、以後天下の中心となつた。

明の政府は紫禁城である。今日故宮博物館と呼ばれているが、総面積七十二万平方メートル。東面五・五キロ、西面四・七キロ、南面七キロ、北面六・八キロもの城壁をもつ壮大な都城である。

この巨大な都城は世祖こと永楽帝により建造された内廷と、その後建造された外朝に大きく分かれていた。中でも外朝の大和殿（明代は奉天殿）と内廷の乾清宮は、王朝の各種儀礼を司る、最も重要な建造物といつていい。紫禁城の正門午門を通り、緩やかにカーブをえがく内金水橋をぬけると、高さ三十六メートル、正面約六十六メートル、奥行き三十三メートル、三層に築かれた白大理石基壇のうえにそびえたつ大和殿に至る。大和殿は天子の正朝として元旦・冬至・万寿（天子の誕生日）を司つたといわれる。また内廷の乾清宮は皇帝の住居であり、実際に政務が行われ、各種使節の引見もここで行われた。

紫禁城の壯麗さは見る者の心をつつ。だがそこは地上の主の居住空間であるとともに、血生臭い宫廷陰謀が繰り返される世の地獄でもあった。

明の十四代皇帝は神宗・万曆帝といつ。明代に名を知られる数多い暗君の中でも、最たる者といわれる神宗も、幼少時は聰明にして、周囲から将来を期待された存在であつたといわれる。

神宗には厳格な家庭教師がいた。名を張居正といつ。やがて神宗が帝位に就いた時、張居正は実権を握り、政界の第一人者にまでな

つた。皇帝たる神宗も、帝王教育をほどこした厳格なる教師張居正には頭があがらない。張居正が実権を握つてから五年、すなわち万暦五年（一五七七）頃には、明の国政は極めて安定したものとなつた。太倉には十年分の粟が満ち、国庫には四百余万両もの余剰の収入があつたといわれる。明国をとりまく国境問題も收まり、明の国威はいやがうえにも高まつた時期であつた。

だが張居正死後反動が来た。厳格な教育を受け聰明であつたはずの神宗が、希代稀にみる暗君に変貌したのである。『神宗万暦年間、皇帝はただ、酒、色、財、気のみこれを求む』と明記にあるように酒色に溺れ、天下の民からの搾取にのみ情熱をかたむけたのである。それだけではない。死に至るまでの二十五年間、一度も政務の場に姿を現さず、全ての朝廷の儀礼が皇帝不在のまま行われるという異常事態となつたのである。

こうして皇帝が紫禁城の奥深くにある間にも危機が進行していた。俗に万暦の三征といわれるもので、寧夏でのモンゴル人將軍ボバイの反乱、貴州での楊応龍という者の反逆、そして豊臣秀吉の朝鮮出兵にともなう援兵派遣である。そして中国東北部では女真の国威が日に日に強大となる。神宗・万暦帝はこうした危機的状況にあつても、政治にまったく関心を示さず、ただ自らの蓄財のみに没頭した。

万暦四十八年（一六一〇）、神宗は死の床にあつた。神宗は真に哀れな帝王であつた。張居正の死後、諫言をこころみる賢臣の一人すらなく、側室鄭妃を偏愛し、ついには第一皇子常洛を廃し、鄭妃の子常洵をたてようとすらした。皇帝の関心は現実の政治のことではなく、もっぱら死後の世界のことになつた。

ついに死が目前に迫つた時、神宗は奇妙な夢を見た。身は雲の上にあり、童女に手をひかれ蓮の葉が浮かぶ浴槽に導かれる。童女に服を脱がされ神宗は湯に浸る。驚くべきことに浴槽の底はエメラルドになつていた。やがて眼前の深い霧が晴れると桃の香りがした。

不意に神宗はそこに、シルクの衣装を身にまとい大理石の椅子に腰かけ、琴をはじく一人の夫人を見る。夫人は濃い紫色の髪に、瞳はどこか空ろで、この世のものとはいいようのない雰囲気をかもしだしていた。やがて夫人は服を脱ぎはじめる。夫人とともに湯につかり酒をすすめられ、ほろ酔いかけんになつた時のことである。不意に夫人は布を神宗の首に巻きつけ、痛みを感じる間もなく神宗は絶命した。

万暦四十八年（一六二〇）七月二十一日、神宗・万暦帝崩御、享年五十八歳。現在、北京から四十キロほどのところに、明の十三人の皇帝の墓である十三陵がある。なかでも一際目をひくのが神宗・万暦帝の定陵である。八百万両という膨大な量の銀をもつて造られたもので、地下宮殿に前殿・中殿・後殿・左背殿・右背殿がしつらえられており、いずれもが大理石でできている。さらに貴重な玉帶・金香合・金塊・銀錢なども出土しており、万暦帝の死後の世界にかけた情熱と同時に、当時の人民の怨嗟の声が聞こえてくるようである。

後世の人はいう。『明の滅びたるは、実に神宗に滅ぶ』と。神宗の死後、傾いた明の国威はついに回復することはなかつたのである。

懸闇官と女狐（前書き）

今回の話は、一読して氣分を害られる方もいらっしゃるかもしれません
ので御注意ください。明代といつよし、中国史を語るついでせめて
通れない言葉にまつわる話です。

万曆帝亡き後、長子常洛が帝位についた。泰昌帝である。そして泰昌帝の長子由校が皇太子となつた。だが泰昌帝は皇太子を愛していなかつた。皇太子は生来愚鈍で、しかも皇族の身でありながら、大工仕事を専ら好むという一風変わつた人物であつたといわれる。

ある日、皇帝と皇太子はささいなことで口論となり、ついには皇帝が皇太子を杖で殴るという事態にまでなつた。明代ほど皇帝の独裁権が強かつた時代は他になく、廷杖といい、臣下に非礼があると皇帝は杖をもつて、衆人環視のもと殴つてもいいしきたりとなつていた。だがいかになんでも皇太子が殴られるのは異常である。場に居合わせた朝臣が止めに入り皇太子はかろうじて、その場だけはきりぬけることができた。

「この光景を目撃し不安にかられる者がいた。皇太子の乳母客氏と対食関係、すなわち夫婦といつてもいい宦官魏忠賢だつた。宦官とは、むろん去勢されて宮廷で雑用をこなす奴隸である。宦官が夫人と夫婦の関係を結ぶといつのはいささか奇異に思えるが、古くは漢の時代には対食関係なるものは存在し、明代においては一人身の宦官はかえつてあざけりを受ける始末であつたといわれる。もちろん、ほとんどは性的関係を度外視したものである。中国の歴代王朝はいずれも宦官によつて亡国の道を歩んだ。そして魏忠賢もまた、今まさに末期明王朝の癌にならうとしていたのである。

「このままでは皇太子様は廃されるやもしれませぬ」

ある日、魏忠賢は宦官の特徴ともいえる甲高い声で、客氏に語り始めた。

「たわむれを申すな、いかになんでもかようなことが」

客氏は一笑にふしたが、その顔色には、かすかに動搖の色があつ

た。

「いや先々のことはわかりませぬ。なにしろ皇太子様は無礼ではござるが愚鈍な御人。陛下がかの御人を後継と認めたとて、陛下の存命中に他の何人かが力を得れば、その地位必ずしも安泰とはいえまい」

魏忠賢がいつになく真剣にかたるので、密氏もまたかすかに表情を変え、

「こなたなにをを申したいのじや、今日はまちと様子がおかしいのではないか」

と疑念をていした。

「この魏忠賢、常々万一人に陥れられた時のため、こうして毒薬を所持しております」

と魏忠賢は懐から一服の薬をとりだした。

密氏の表情から笑みが消えた。宫廷はいわば権力闘争の修羅場である。今日権勢を誇った者でも、明日にはささいなことで失脚し命までも失うことも稀ではない。本人だけでなく一族にまで災いを及ぶこともあった。特に去勢した宦官は、常に人から影であざけりを受け、いつ何時身の破滅が待ちかまえていてもおかしくなかつた。

「もし皇太子様が地位を追われた場合、禍は我らにも及びましよう。皇帝の身辺を世話する役目を「えられた者等の中には、某の息のかかつた者が数多おります」

宦官の多くは宫廷に奉仕する下僕として生涯を送る。ただし例外もいる。生来機転がきき、人にとりいる才があり、運にも恵まれた一握りの宦官のみは、きらびやかな衣装を身にまとい、まるで王侯並みの生活を送ることができる。こつしたいわば高級宦官は、身分の低い宦官をあごで使うことができる。宫廷、果ては皇帝周辺にも諜者として、自らの息のかかつた下級宦官が数多いのが普通だった。

「もしやこなた皇帝を殺めるつもりであるのか」

「皇太子様に万ーのことがあつてからでは遅すぎます。陛下には

頭痛の持病が「ざれば、」の毒薬を良薬と偽つて口にさせることも不可能ではござりませぬ」

魏忠賢の怪しい鳥のよつた眼光が一層鋭くなつた。

「ならぬ、それはならぬぞ、陛下を殺めるなど、かよつたことわらわは反対じゃ」

密氏のうひたえようは並大抵のものではなかつた。だが魏忠賢は密氏をさらに脅し、あれいは權勢を得た後を語り甘言をもつて籠絡し、ついには同意させることとなつた。

魏忠賢はもと無頼の徒である。若い頃は専ら博打にあけくれ、ついには多額の借金をして生活に困窮し、自ら宦官になる道を選んだのである。無学文盲であるが人の心を読むすべにたけ、また博打をつちかつた勘から、将来を見通すこともできた。いわば魏忠賢は生涯で最大の賭けにでたわけである。

皇帝は哀れであった。薬房を司る崔文昇といふ宦官のすすめる薬を服用した泰昌帝は、下痢を繰り返し、ついに危篤となつたのである。皇帝倒れるの報に宫廷は騒然となつた。崔文昇は多くの人々の非難をあびたが、魏忠賢が彼を擁護した。わずか数ヶ月の在位で崩御した三十九歳の皇帝を取り囲む廷臣の中に、冷たくなつた皇帝の骸をみおろす魏忠賢の姿もあつた。ほどなく由校が明朝の十六代皇帝となる。天啓帝である。天啓帝の即位は同時に、魏忠賢専横の時代の始まりでもあつた。

天啓帝が即位し、皇帝と最も親しい魏忠賢と密氏が權勢の頂点の座に近づいたといつても、まだ目の上のこぶがあつた。かつて魏忠賢を皇帝に強く推薦した、いわば恩人ともいえる王安であった。王安もまた宦官である。だが全ての宦官が悪であつたわけではない。かつて万曆帝が鄭貴妃を愛するあまり、その子を帝位につけ泰昌帝を廃さんとした際、筋目論をもちだし天啓帝をかばつた王安は硬骨の士であり、万曆帝の時代に傾いた財政を立て直さんとする、優れ

た志をもつた政治家であった。

だが皇帝をたぶらかし権勢を独占せんと欲す客氏と魏忠賢にとつて、王安のような清廉の士は邪魔者でしかない。王安は病弱であった。天啓帝が即位した後、宦官としては最高位である司礼監への就任を要請されたが、病を理由に就任を一度は拒む。だが繰り返しすすめられ、ついに意を決した時、不幸はおこった。皇帝の側近くの客氏が、王安にたくらみ事ありと讒言したのである。

皇帝は容易に信じなかつたが王安に怨恨のある劉朝という者が、客氏の言葉に嘘はない、さらなる讒言をしたのである。王安は捕らえられ牢に入れられた。さしもの魏忠賢も恩人の王安を滅ぼすことをためらいがあつたが、客氏は容赦しなかつた。獄中の王安は食を絶たれ日に日に痩せ細つていつたが、幾度も無実を訴え簡単に死なかつた。客氏は皇帝の気が変わることを恐れて、ついに強行手段にでた。刺客を獄に送り王安に疑念は解けたと偽り食事を与え、喜び口にした王安はほどなく絶命した。皇帝には王安は獄中で自殺したと報告されたのである。

もはや魏忠賢と客氏の勝る権力を持つ者は、皇帝を除き何人もいなくなつた。魏忠賢と客氏は皇帝を骨抜きにせんと画策した。

宮廷は一種のハーレムであり、皇帝の周囲には皇后の他の多くの側女がいる。皇帝の閨での事を同るのも宦官の重大な役目で、敬事房という特別な役職まで存在した。

明代、敬事房の役職にある宦官は皇帝が夕食の際、『綠頭牌』といわれる妃賓の名がはいつた札を食事とともに持参する。皇帝が夜伽を欲していれば、中の一枚を裏返しにして宦官をさがらせる。指名を受けた妃賓は入念な入浴と化粧の後、宦官に全裸にされ凶器等を隠し持つてないか調べられる。そして羽毛の袋に包まれて皇帝の寝所に送りこまれるのである。

だが敬事房の宦官の役目は、まだ終わりではない。皇帝が妃賓とたわむれる時間は限られているのである。刻限が来ると、

「是 時候了」

と叫び、皇帝が応じないと寝所につかつかと入りこみ、両者がいかなる状況にあらうと、妃賓を再び袋につめ連行してしまつ。むろん絶対的な権力をもつはずの皇帝といえど逆らうこととは許されない。宦官はそれほどまでの力を持つていたのである。天啓帝時代の敬事房には魏忠賢の息のかかつた者が就任し、皇帝の性生活の監視者でもある魏忠賢は、いかにしたら皇帝を腑抜けにできるか、次第に悪知恵を働くかするようになる。生来意思薄弱で、まだ年若い天啓帝の女に溺れる日々が始まった。

魏忠賢は絶対的の権力を手にし、自らの意に逆らう者を宮廷から遠ざける一方、天啓三年（一六二三）人の恐れる東廠のトップに立つた。明王朝はある種の警察国家である。東廠は明王朝の特務機関で官吏に対し不穏な動きがないか常に監視していくばかりか、民間にも目を光させており、反体制の動きに対し敏感に反応した。そして東廠のトップには必ず宦官が起用された。

ある時、北京の市井の居酒屋で男が酒を飲んでいた。と、不意外で銅鑼の音がした。見ると魏忠賢が多くの警護の兵士に守られ、背後に料理人や俳優まで従えて街を闊歩していく。

「玉無し野郎がたいした威勢だな」

男がため息をつきながらいうと、一緒に飲んでいた者が、「口を慎め、どこに御上の目が光っているかわからんぞ」とかすかに顔色を変えて注意をうながした。

「馬鹿野郎、魏忠賢がなんだといふんだ。小便ちびり野郎なんて怖くもなんともねえ」

宦官は性器を切除されてしましの後は、排尿がコントロールできず失禁することがしばしばだつたといわれる。

「魏忠賢がなんだといふんだ、奴に俺の皮をはがせるとでもいうのか」

周囲の者が男をさらに止めようとしたが、酒が入っているせいで

聞く耳を持とうとしない。そして事態は最悪の結果をむかえる」となる。

その夜遅く、男はやはり深酒をして寝こんでいた。不意に外で騒がしい物音がした。かすかに目を覚ますと声が聞こえてきた。

「御上より逮捕状がでてある。家主は速やかに出でよ」

男は逃走を図ろうとしたが時すでに遅かった。屋敷は東廠により完全に包囲されていたのである。男は連行され魏忠賢の前に引き出され、本当に体の皮をはがされてしまった。一緒に酒を飲んでいた男の仲間も連行され、一連の見せしめの儀式をふるえながら見どけた後に釈放された。

魏忠賢のおごりはとどまるところを知らず、ついには自らを聖人孔子に勝る存在といい、各地に彼を祭る祠まで建造させる始末だった。だが誰しもが皇帝気取りで上奏されてくる案件に目を通す（ただし彼は字が読めないので部下に読ませた）魏忠賢の横暴を黙つて見ていたわけではなかった。特に東林党といわれる官僚集団と魏忠賢等宦官一派との対立は彼の死後、明朝の滅亡まで尾を引いていくこととなる。

さらに應山出身で楊漣という者が立ち上がり、天啓四年（一六二四）六月、魏忠賢を二十四もの罪で皇帝に弾劾し、宮廷はしばし騒然となつた。だが皇帝は愚かであつた。一時は魏忠賢の処罰すら考えた天啓帝は、忠賢の哀訴におされて、ついには逆に楊漣を疑う始末であつた。楊漣の再度の訴えも、完全武装した宦官数百人に取り囲まれた皇帝には届かなかつた。魏忠賢の勝利である。楊漣はついに投獄された。

楊漣はかつて多くの貧民に施しを与えて救済した、優れた人となりをもつた人物で、いよいよ連行されようとする際、数万の人々が沿道につめかけ無事を祈つて泣いた。だが彼等の祈りもついにとどくことはなかつた。賄賂の罪をでつちあげられた楊漣には、凄惨な

拷問と酷刑が待ち構えていたのである。

がんとして罪を認めようとしない楊漣は床に突き倒され、足や胴体に土嚢を積み上げられた。こつして身動きできなくなつたところへ、耳には長く巨大な釘が差しこまれる。鉄槌で釘の頭を叩き続けられ、耳を貫いて逆の方角から釘の先端が飛び出し床に突きささる。楊漣はついに無念に眼光をいからせたまま絶命した。楊漣が絶命した後も土嚢は積み重ねられ、ついには腸が飛び出したとさえいわれている。楊漣の死後、彼の一族もまた根絶やしにされた。

かつて秦も漢も唐も宦官により滅亡の道を歩んだ。そして明もまた、同様に瀕死の状態にまで至つとしていたのである。魏忠賢専横の時代は、暗君天啓帝の死まで続くこととなる。

悪魔面と女狐（後書き）

最近、性描写が露骨すぎるるので、それなりに修正したいと思います（汗）

後金は天命九年（一六一四）、都を東京から瀋陽（遼寧省）へ移していた。わずか六年ほどの間に五度にもわたり都を移したわけである。背景には土地に執着することなく移動をくりかえす草原の民の習性があつたであろうことは、想像に難くない。

瀋陽はかつて遼の都城があつた地でもあり、元の時代には瀋州路といわれた。当時は中路と東路の一区画に主に分類されており、中路はさらに公務を行う外朝と奴兒哈赤の居住空間たる内廷に分岐されていた。まず後に大清門と名付けられた巨大な門をくぐると、目付くのが崇政殿である。崇政殿は主に授封・任免等の儀式に用いられたと思われる。崇政殿から三層からなる鳳凰楼をぬけると、奴兒哈赤の居住空間たる清寧宮である。ここでは諸王・諸臣の宴会なども頻繁に行われていたようである。

東路に目を移すと、大政殿といわれる、もう一つの主殿を中心にして、八王亭といわれる建造物が東西に四つずつ、合わせて八つ整然と並んでいる。大政殿は八角形からなる奇妙な形をした建造物で、政治・軍事の議政、さらには酒宴や八旗の閱兵に用いられた。八王亭とは、八旗の部隊がそれぞれの所属ごとに整列した場所なのである。

この瀋陽・故宮は一〇〇四年にはユネスコ世界遺産に登録され、奴兒哈赤等の生きた時代を今日に伝える貴重な文化財である。瀋陽でドルゴンは順調に成長を続けていた。だが天命十一年（一六一六）、ドルゴンの身に突如不幸が襲う。父・奴兒哈赤と母・烏拉納喇氏を一度に失うのである。

ドルゴンは十五歳になろうとしていた。当時としてはすでに立派な大人である。成長したドルゴンは背丈は同年代の青年達より高く、すらりとして痩せていた。切れ長の目に頬骨が高い。整った目鼻立

ちが、いかにも人に犀利な印象を与える。

すでに狩獵等にも幾度か参加し、その成長ぶりに奴兒哈赤も目を見張った。そうしたある日、ドルゴンは不意に奴兒哈赤に清寧宮に呼ばれた。

「今日はそなたに授けたいものがあつてのう」

奴兒哈赤は高齢のためしわ深くなつたが、老いの中にも円熟さを感じさせる。奴兒哈赤の前に巨大な木箱が置かれていた。ドルゴンがあけると、そこには一体の文殊菩薩像が納められていた。

「文殊菩薩は知恵の源泉じや。汝はいつまでもそれを手元に置き、功德にあずかるようつとめよ」

文殊菩薩は髪を結い、瓔珞・腕釤などに身を飾り、右手で剣をふりかざし、左手に經典をしつかりと握つていた。だが奇妙なことが一つだけあつた。

「父上、何故菩薩に目がないのですか」

「うむ、それはのう、かの菩薩の目はそなたの心にあるからじや」

ドルゴンはしばし怪訝な表情を浮かべた。

「そなたには、この先数多の苦難待ち構えておるうへ、眞の難題に直面したとき、そなたの心にある文殊菩薩の目が開き、正しい道へ導くであろう。わしがそなたに教えたいことはまだまだあるが、そうそう先行き長くない。わしが死しても文殊菩薩の加護があるかぎり、御身は安泰とこころえよ」

そこまでいふと、奴兒哈赤は苦しそうにせきをした。

「父上、どこかお体が悪うござりますか」

「あんずることはない。そなたこそ生来病弱の身、体を愛えよ」

ドルゴンは生来頑健なほうではなかつた。ときおり微熱に苦しむ持病のようなものがあつたのである。この時ドルゴンは厳格だった奴兒哈赤に、父としての慈愛のようなものをかすかに感じた。時に奴兒哈赤六十八歳。ほどなく明との国境に近い寧遠城に二十万もの大軍をもつて出撃していった。むろんドルゴンは奴兒哈赤との今生の別れが来たことをしるよしもなかつた。

さて晩年の奴兒哈赤を苦しめた者に毛文竜という人物がいた。毛文竜は明の連兵遊撃という肩書きをもつてゐるが、実のところ海賊に等しい存在である。杭州府（浙江省）の出自にして、幼少時より腕力にだけは異常に自信があつたといわれる。明の遼東司令官李成梁に従い女真族との戦いで武功をあげ、後に明の武科の試験に合格し累進した。サルフの合戦にも従軍したが、明が大敗した後は独自の水軍を編成した。

天命六年（一六二一）、毛文竜は巡撫の王化貞という者の命を受け、兵二百を四隻の船に分乗させ遼東半島を南下。渤海海峡を通過して、鴨綠江河口にまで達した。さらに夜陰に乘じて鴨綠江をさかのぼり、鎮江というところで敵の皆の内應者と通じて、合図とともに内・外から一斉に後金軍を挾撃した。毛文竜が火薬兵器までも巧みに使用したのと比べ、後金側の不幸はおよそ海軍というものが皆無だつたことである。結局、散々に打ち破られ鎮江城まで奪われることとなつた。

その後も独自のゲリラ戦で奴兒哈赤等、後金を苦しめた男毛文竜は、朝鮮半島の北端、厳密には平安道沿岸に浮かぶ皮島を根拠地とし、今もまだ奴兒哈赤等の隙をつかがつてゐた。奴兒哈赤にとり獅子身中の虫といえるだらう。

当時東シナ海のありようも激変しつつあつた。かつて北虜南倭といわれるようない倭寇の跋扈した東シナ海は、今また新たに西欧諸国の進出の時代をむかえようとしていた。十七世紀はオランダが世界を支配した時代である。一六〇一年にはインドネシアに到達。オランダ東インド会社を設立し、さらに台湾にも進出、天命八年（一六二三）^{（ほつうじつ）}澎湖島を占領。翌年には安平にゼーランディア城を築いてゐる。だが奴兒哈赤やドルゴン等、女真の民が海の世界と直接対峙するのには、まだはるか時を置かねばならなかつた。

陸地での戦闘に話を戻すと、明王朝は歴世のいかな王朝よりも長城での防衛に重点を置いていた。遼西回廊は山海関から北上し遼西の広寧まで延々海沿いに続く交通路である。南から山海関（河北省）・前屯（遼寧省）・寧遠（遼寧省）・塔山（遼寧省）・松山（遼寧省）・錦州（遼寧省）と堅城が続き、強力な軍事ラインを形成している。

奴兒哈赤は寧遠城と、城の背後に霧の中威容をもつて立ちはだかる万里の長城を眼前にしていた。なにしろ万里の長城は二十一世紀の今日、宇宙飛行士が肉眼で観察できる地上で唯一の建造物なのである。思わず奴兒哈赤の胸に迫つてくるものがあった。

「かようなものが人間の手によつて造られるとは、やはり中原の民は侮れぬ。果たして我が命ある間に長城をぬくことができるか否か」奴兒哈赤は自分に後残された時間を考えずにはいられなかつた。

と、不意に奴兒哈赤は感じたことのない胸の苦しみに襲われた。喀血し、多くの将兵達が驚愕する中、落馬し意識を失つたのである。

奴兒哈赤は三日三晩人事不詳となつたが、命には別状がなかつた。むろん後金の軍事活動は奴兒哈赤の病により大きく停滞することとなつた。

一方、明の朝廷は奴兒哈赤現るの報におおいに動搖していた。多くの者が国境の要衝山海関まで退いて守りに徹すべきと主張するのに対し、一人頑として寧遠城での決戦を主張して譲らない者がいた。袁崇煥という四十三歳の文人出身の將軍で、およそ文人出身らしく華奢な体格をしていた。將兵達は最初彼を侮つたが、多くの戦場で袁崇煥の策は不思議とよく当たり、やがて人は彼をして、古の三国時代の軍師諸葛亮孔明になぞられて、今孔明とよぶようになつた。袁崇煥にはある必勝の策があつたのである。だが後金との決戦を前にし、袁崇煥でさえ予測できない事態が勃発した。

「將軍、新たに朝廷より派遣された高第なる者が、錦州・松山等の諸城をことごとく撤収し、山海関に退きました。いかがなさります

か

「我等はここに孤立したといつわけか、恐らく魏忠賢等、朝廷を牛耳つてゐる宦官どもが裏で糸を引いてゐるのであつ。なれどわしはこの城を守ると固く心に決めた。我が祖国を蹂躪しようとする者があるに、ここを退いて他に逃げていく地もあるまい」

袁崇煥の言葉は、深く將兵達の心をとらえた。

「恐れながら、我等一同、皆將軍とともに参ります。必ずやここを死に場所といたしましょうぞ」

一人がいうと、他の者も同意する。袁崇煥は軽く微笑みを浮かべ、「よう申した、ならば我等一同、ここに心を一つにし必ずや敵に一矢報いようぞ」

と万感の思いでいうと、血判状をつくり、袁崇煥始め將軍達の多くが指をちぎり決意を新たにした。

奴兒哈赤は病の身に鞭打つて城に迫つてゐた。寧遠城はほほ方形に近い形をしており、城壁の高さ約十メートル、城壁の厚さは基底部で約九メートル、上部で約ハメートルあつた。ここを越えれば国境の山海關があり、その先に北京がある。だが奴兒哈赤は、この戦いが生涯最後の戦いになることを、むろん知らずにいた。

寧遠城の砲声（一）～奴兒哈赤の不覚

袁崇煥は東莞（広東省）の出身である。三十五歳にして進士に及第し、まずまず順風満帆な人生の船出であったといえるだろう。だが袁崇煥の不思議なところは、すでに福建の地方官であった頃から、文官の身でありながら軍事に深く傾倒し、好んで国防を語つたことであつた。変わり者である。胆力は無論、尋常一樣ではない。いかな窮地にあつてもどこかひょうひょうとしたところがあり、それがまた配下をして、彼を深く信頼させることとなつた。

寧遠に赴任した袁崇煥は、寧遠城の城郭をさらに堅牢なものにすると同時に、周辺の開発にも着手した。周辺の人口は飛躍的に増え、五万戸をようするまでになつたといわれる。また、寧遠より東はモンゴル人の割拠する地であつたが、袁崇煥は大凌河付近でモンゴル軍を撃退し、戦上手ぶりをいかんなく發揮した。

天命十一年（一六一六）一月、袁崇煥は寧遠城より噂に聞く八旗の威容を間のあたりにし、思わず息を飲んだ。後金軍約二十万、対する明軍はおよそ四万ほどである。

中国本土と東北地方を隔てる長城地帯は、ほとんどが山岳部で、平地部は海岸線に沿つてわずかに存在するにすぎない。東北から本土に入るには沿岸部を縦断するか、西に迂回して山西省に入るしかない。この地形を見て袁崇煥は、寧遠城に後金軍を釘付けとし、寧遠海上の覚華島の海軍とともに、海陸から敵を攻囲する作戦を皇帝に進言した。

時に一月二十四日、後金軍八旗の精兵二十万は、まるで巨大津波が移動するかのように、一斉に寧遠城に迫つた。八男ホンタイジをはじめ八旗の主達は、奴兒哈赤の体調を懸念して攻撃を見合わせるよう進言したが、奴兒哈赤は頑なに聞かなかつた。

「押し寄せてまいります」

揮下の将が告げると、城の奥深くの椅子に悠然と腰かけた袁崇煥は、

「よし、各隊各将はかねてからの指示どおり動け、皆、今日ここで死ぬことこそ國に対する忠義と思え」

と落ち着いた声でいった。

この合戦に先立ち、袁崇煥は城の中で特に防備が薄い箇所は補強をすでに完了し、さらに味方の中で敵に内通する恐れのある者は斬り捨てていた。さらに圧倒的な後金の騎兵に対し、袁崇煥は火器をもつて待ちかまえていた。

中国における火器の歴史は古く、宋代にはすでに使用されていたといわれる。火竜槍といわれる青銅でできた筒に大砲をつめた兵器、さらには火縄銃、そして仏郎機砲まで使用され、後金の主力騎兵を足止めさせることに成功する。袁崇煥の優れていた点は、合戦の予行演習において火器の使用に適正のある者を選抜し、訓練に訓練を重ねさせ、彼らの多くが扱いに習熟していたことだった。

後金側では第一陣をホンタイジがつとめたが、あえなく撤退。第二陣はアミンが率いたが、これもはかばしい戦果がえられないで撤退した。

「よし敵がひるんだぞ、攻夷砲を用意せよ」

袁崇煥の指示はただちに城の隅々までいきわたり、鈍い音とともに後金兵が密集する地点に、かつてない威力をもつた大砲が着弾する。それは袁崇煥が明の朝廷の多くの者の反対を押し切つてまで戦場に持ち込んだ、攻夷砲と名づけられたポルトガル製の大砲だつた。攻夷砲は長さ約三メートル、口径十センチ、重さ約三トン。前装砲で砲身の壁が厚く重い砲弾を用いるのに適していた。

その破壊力たるや中国の火器の比ではなく、たちまちのうちに後金兵は阿鼻叫喚の地獄を味わうこととなる。混乱が八旗の各部隊に伝播するまではかからなかつた。結局この日、奴兒哈赤は予想外の死者を出して兵を退くに至つたのである。

「馬鹿者共が、我ら一十万の大軍をもつて城一つ落とせぬとあつては、敵のあざけりを受けるは必定」

「恐れながら、父上がかような身の上なれば、我ら安堵して戦に望むことかないません。やはりここは一旦兵を退くが肝要かと」

不安げに発言したのは、ドルゴンより七つ年上で母を同じくする兄、阿濟格だつた。阿濟格はハ旗のうち正黄旗の旗主でもあつた。

「それは言い訳であろう。汝等が臆しておるだけのこと」

いまいましげに机を叩いた奴児哈赤であつたが、次の瞬間には興奮のあまり、再び苦しそうにせきをした。動悸の高鳴りと同時にめまいがし、不意に心配気に見守る諸王達の顔が遠い存在に思えた。

「父上、無理をなさつてはいけませぬ」

ホンタイジが気遣つたが、奴児哈赤は相変わらず空ろな眼光をしたままだつた。奴児哈赤の脳裏をふと遼東の山河がよぎつた。奇妙なほど淡い風景だつた。やがて、まだ幼いドルゴンと狩猟にでかけ、ドルゴンが初めて獲物を仕留めた日の光景が、ありありと甦つた。

「いや、引き返すわけにはいかぬ。わしは漢人共の捕虜から聞かされたことがある。中原の地の豊かさ、そこは我等の生きる地とは別の天地。我等は貧しい。わしは生ある間に女真の民に知らしめたいのじや、冬は凍てつく大地に震え、例え雪がとけても、野の獸とともに生きる道ではなく、豊かに生きる術を、故に我等引き返すわけにはいかぬ」

奴児哈赤の静かだが確かな闘志は、諸王達にも伝わり、それぞれが決戦を覚悟せずにはいられなかつた。

翌未明、後金軍による覚悟の城攻めは開始された。奴児哈赤は作戦を変更し、比較的防備が手薄な西側の城壁に兵力を集中させる。むろん城壁からは弓矢・鉄砲が雨あられと降りそそぐ。諸王達が驚愕したのは、奴児哈赤自らが敵の飛び道具の射程距離まで馬をすす

め、兵士達を叱咤激励し始めたことだった。

攻撃の第一波が挫かれたと見るや、奴兒哈赤はただちに新たな部隊を投入する。壯絶な白兵戦が一時間あまりも続いた。後金の八旗の部隊は、味方が倒れても倒れても屍を踏み越えて城壁に取りつこうとする。やがて夜明けが来て、陽の光により八旗の部隊の鎧の色がはつきりと識別できるほどになつても、なお波状攻撃は続けられた。

さしも城壁を死守してきた守備兵達にも、疲労の色が濃くなつてきた。そしてついに、地面を掘つていていた後金兵の一部が城壁に通じる突破口を開いた。後金兵達が怒濤のようになだれこんでくる。

「恐れながら、敵が押し寄せてまいります。お逃げくださいませ」

一人の背に矢の刺さつた血まみれの兵士が、片膝をつき、椅子に腰かけた袁崇煥に逃亡を進めた。

その時、袁崇煥は立ち上がる。抜刀すると、自ら殺到する後金兵の前に立ちふさがつた。指揮官の勇に一時おおいに動搖した守備兵達も立ちなおり、激闘し、さらには城壁の穴を埋め立てる作業が決死の覚悟で行われた。この間、袁崇煥は左臂を負傷し城内に担ぎ込まれるも、闘志はいささかも衰えることなく、軍服をちぎつて傷口をふさぎ、刀を手にし再び後金兵の前に勇士を現わした。

激闘すること数時間、ついに後金兵達はしりぞけられ、城壁の穴も埋められた。なおも食いさがろうとする後金の部隊であつたが、袁崇煥は城壁の前に油をまき、そこに火をはなち、多くの兵士達が炎に身を焦がすことになる。

「己、わしともあろう者が戦場で不覚をとるとは」

奴兒哈赤は歯軋りした。二十五歳で自立して以来、生涯初めて味わう屈辱であつた。突如、奴兒哈赤はまるで絶望した者のように、敵の方角にむかつて単騎で突撃を開始する。剣をぬいた奴兒哈赤の前に、まるで狙いすましたように攻夷砲が着弾する。次の瞬間、

砂塵がおこつた。もうもうと立ちのぼる砂煙の後に、地に伏した奴兒哈赤の無残な姿があつた。

「大汗！」

「大汗、しつかりなさいませ！」

だが人事不詳の奴兒哈赤の耳に、兵士達の声は届かないも同然だつた。重体の奴兒哈赤は、ただちに陣の奥深くに担ぎこまれた。

その夜、後金の部隊は夜陰にまぎれて肅々と撤兵を開始した。翌明け方、敵の姿が消えたことに、寧遠城では狂つたように勝利の歓声が響いた。一方、負傷した奴兒哈赤の命脈が尽きる時は、今や一刻と迫つていた。

八月、後金軍は瀋陽への帰路を急いでいた。八旗の部隊の先頭には奴兒哈赤ではなく、八男ホンタイジの姿があつた。軍勢の行進は鈍く、どの兵士も表情がどこか重苦しい、ある種の悲壮感にうちひしがれた様子がうかがわれた。単に長対陣と敗戦からくる疲労だけではない何事かが、全軍を支配していたのである。軍勢を率いるホンタイジは、ある悲壮な覚悟を胸に、瀋陽への帰路をいそいでいた……。

寧遠での敗戦で重症を負つた奴兒哈赤は、その後も病状いっこうにはかばかしくなく、清河の温泉での治療も空しく、瀋陽から約二十キロの場所で、ついに危篤の状況となつた。死を覚悟した奴兒哈赤は、自らの枕元に諸王達を参集させた。

「よいかおまえ達よく聞くがよい。これがわしの最後の言葉じや。我亡き後、汗の位を継ぐ者はホンタイジとする」

諸王達の間から一斉に驚きの声があがり、座の少し後ろに控えていたホンタイジに視線が集まつた。

「恐れながら父上、かような不吉なことを申されるな、このホンタイジにそのような重責はまつとうできませぬ。どうか今一度元気な姿で……」

とホンタイジは、儀礼的な意味も含めて一度は辞退してみせた。

「氣休めはいらぬ。わしの命運はすでに尽きたも同然。わしは十六にして六人の家来、五人の下僕の女、一匹の馬、四頭の牛を父より与えられ、今日まで諸所を転戦し、ついには女真を統一するに至つた。なれど衰えたりとはい、明は我らを滅ぼす機を虎視眈々とうかがつており、これを討滅することかなわずは無念の至り。例え我死すとも魂は死なず、虎となりて北京を陥れるであろう。ホンタイジよ汝は武勇ではわしに劣るであろう、なれど政治をつかさざれば

わしより優れおる。他の者も心してホンタイジに仕えよ。夢々誤ることなきよう。それがわしの最後の願い」

「我等一同、慎みて新たなる汗に忠誠を誓う所存」

といったのはダイシャンだった。同時に諸王達が一斉に片膝をつき、ホンタイジに忠誠を誓つた。

「それでよい、わしはホンタイジにおりいつて話しがある。他の者は下がるがよい」

諸王達は部屋を後にし、奴兒哈赤とホンタイジだけが残つた。しばし沈黙があつた。

「ホンタイジよ汝は漢人達の国の歴史において、隋の楊堅のことを存じておるか」

隋の楊堅は、数百年にわたつて動乱の時代が続いた中国を統一し、隋の王朝を築いた英傑である。だが死にのぞんで、後に中国史に暗君として名高い楊広（煬帝）を後継者とし将来を託すも、自らが寵愛する宣華夫人が、楊広によりかどわかされたことを知り、悶々のうちに世を去つた。

「存じておるます。なれどそれがし父上が何を申したいのかわからりませぬ」

その時ホンタイジは、自らを見つめる奴兒哈赤の目に、哀れみとも侮蔑ともとれる色をかすかに見て顔色を変えた。

「わしの母は節穴ではないぞ。そちと阿巴亥のことよ」

ホンタイジの受けた衝撃ははかりしぬ、瞬時目眩がし、立つていることさえおぼつかない様子となつた。ホンタイジは奴兒哈赤の留守を見計らい、ドルゴンの生母阿巴亥と密かに会つしがあつたのである。

「本来なら、汝のような不孝な子は斬つて捨てていたところだ。なれどわしが見たところ、後金の将来を託せるのは汝しかおらん。他の誰が国を継いだとて、ゆくゆく後金は瓦解し、わしの生涯も水の泡となるつ。わしが汝を斬つて捨てるかわりに、汝があの女を斬れ。

そなたならできるはずじゃ、私情に流されることなく、国の将来を危うくする禍根を絶つことが

しばし一人の間に沈黙があつた。ホンタイジは胸に去来するものがあまりに大きく、言葉すら発することができなかつたのである。やがて、

「ならば、三人の子等をいかがいたしますか」とようやく言葉を発した。

「生かせよ、全てはわしが命じたこと。そなたに罪はない。特にドルゴンはゆくゆく役に立つ。後金の命運を左右するやもしれぬ」不意にホンタイジは一、二歩後ろに下がり、その場に膝を突いた。「父上、どうか拙者の不孝をお許しくださいませ。このホンタイジ生涯の心得違いを致しておりました。父上の志は必ずや拙者が受け継いでご覧にいれます」

ホンタイジは唇を噛みしめながら、叫びともどれる声を発した。

「うむ、それでよい。我が子ホンダイジよ、それでこそ我が志を継ぐ者よ」

奴児哈赤はかすかに笑みさえ浮かべた。

その夜嵐になつた。奴児哈赤はこんこんと眠りについていたが、雷鳴が天を裂いた瞬間、突如として目を見開き寝床から起きあがつた。刀をとると一閃、見守る諸王達が驚きの色をうかべると、その鋭い眼光がホンタイジを凝視し、

「後は頼んだぞ……」

と一言いい、自らの喉元に刃を押しあてた。鮮血が飛び散るとともに、諸王達は一齊に泣き崩れたが、ホンタイジは冷厳な眼差しを浮かべたままだつた。すでにホンタイジの心は、一族を背負う悲痛ともとれる覚悟で貫かれていたのである。時に奴児哈赤は六十八歳だつた。後金に新たな時が訪れようとしていた。

鳥拉納喇氏」と阿巴亥は、数名の侍女とともに銀の雲が降りしきる深い森の奥へと続く道を歩んでいた。冬の森は死の世界である。森羅万象すべてが雪の中息を潜め、生ある者の気配一つしない。奇妙なことに、雪の野に月に照らされた一筋の道だけが鮮明に浮き上がり、山頂へと阿巴亥と松明を手にした侍女達を誘っていた。やがて月が無明と変わる頃、

「おまえ達は王宮に戻るがよい」

と、阿巴亥は侍女達に告げた。

「かようなところに大妃様一人を置いて去ることはできません。もし万一のことあらば、私達自身も大汗様より咎めを受けることになります」

「わらわのことなら心配いらぬ。明日の夜明け前、大汗が王宮に戻る頃には、わらわもまた帰城しておるであろう」

阿巴亥は嫌がる侍女達を無理やり下がらせた。やがて皆に腰をおろして、しばし川のせせらぎに耳をかたむけていると、馬のいななき声がした。騎乗していたのは、すでに壯年に達していると思われる、頑健な体躯をした武者だった。

「そなたを待つていた」

そういうと阿巴亥は軽く微笑み、武者が馬上差し出す手に導かれるように、雪原の中に消えた。

藩陽・故宮の清寧宮で、鳥拉納喇氏は部屋の外で侍女達が騒ぐ音で目を覚ました。

「大妃様に申し上げます」

と膝をついたのは、十五歳になつたウランだった。ウランはこの年から宮廷に仕える身となり、数年前他界した奴兒哈赤の正夫人葉赫納喇氏（エホナラ氏）に代わって大妃の地位についていた鳥拉納喇氏

の身辺の世話などをしていた。

「寧遠に出兵した二十万の軍勢が帰還した模様です……」

ウランは不意に言葉を濁した。

「なんじゃ、はつきり申せ」

「それがどうも軍勢の様子がただならぬとのこと、軍勢を率いているの大汗ではなく、ホンタイジ様であるとか」

「なんと寧遠では手痛い敗北を察したと聞いたが、よもや大汗の身に大事でもあつたというか」

鳥拉納喇氏がかすかに動搖していると、他の侍女がその場に膝をつき、

「申し上げます。大妃様と一人の子等は、速やかに城を出て軍勢を出迎えよとのホンタイジ様の命にござります」

状況がよく把握できぬまま、鳥拉納喇氏とドルゴン、そして弟の多鐸は城の外に八旗の部隊を出迎えた。他に城の女子供達は全て軍勢を出迎えることとなつた。

この時ホンタイジは正白旗の部隊を所有していた。夜明け前の静寂の中、鮮やかな純白の部隊が整然と隊列を組み行進し、部隊の最後尾には騎乗して身辺の様子をつかがうホンタイジの姿もあつた。鳥拉納喇氏がホンタイジの姿に気づいた時だつた、突如として正白旗の護衛（各旗王の親衛隊）の兵士達が騎馬で近づき、一斉に下馬して鳥拉納喇氏の前に片膝をついた。

鳥拉納喇氏が何事かと驚きの色を浮かべると、ホンタイジの最も側近くの護衛の臣が、

「皆もよく聞くがよい、これより亡き大汗の命を伝える」

と大声で衝撃的な言葉を発した。奴兒哈赤すでに死す、この一事だけでも女達を動搖させるのに十分だつた。だが次に伝えられた言葉は、鳥拉納喇氏にとつてさらに驚くべきものだつた。

「大妃様におかれでは、大汗とともに一国を支える重責を担いながら、常日頃より放埒にして、己が身分をわきまえぬ言動多々あり。

よつてその身分を剥奪し、身柄を一人の子等と幽閉するよつことの
亡き大汗の命である

鳥拉納喇氏は、しばし魂が足もとからぬけていくかのよつな錯覚
におそれた。

「己、母上に一体どのよつな非があつたといつのだ」

激高したのはドルゴンだつた。取り囲む護衛の兵士達から、かす
かに殺氣が伝わってきて、ドルゴンは思わず剣をぬく。むろんまだ
戦場で人を斬つたこともないドルゴンは、剣を持つ手がかすかに震
えてもいた。もともと氣の弱い多鐸にいたつては、ぶるぶると震え
目に涙をためていた。

「全では亡き大汗の命にござる」

「父上が死んだだと、でたらめをいふな。ましてや何故父上が母上
にかよくな仕打ちをせねばならぬのだ」

「おやめなさい、ドルゴン」

鳥拉納喇氏がドルゴンを制止した。次の瞬間、馬上じつと一部始
終を見守るホンタイジと田があつた。むろん鳥拉納喇氏は事のいき
さつを全て知るよしもなかつた。ただ状況から察すると、ホンタイ
ジが奴兒哈赤から後継者として指名されたことは、ほほ間違いなか
つた。もしそうだとすると、自分との今までの関係は、全て闇に葬
られなければならぬ醜聞である。

鳥拉納喇氏は、しばし恨みに満ちた目をホンタイジに向けた。

『わらわを捨て、新たな大汗の地位を固める腹か』

叫びが届くなら、鳥拉納喇氏はそう叫んでいたかもしれない。ホ
ンタイジもまた何事かを察してか、鳥拉納喇氏の鋭い眼光をゆつく
りと避けると、一度と振りかえろうとはしなかつた。

「恐れながら、これは一体何事、いかなる理由があつて母者は身分
を奪われねばならぬのでござるか！」

とホンタイジの馬の前に片膝をつき、必死に食い下がつたのは、

ドルゴンと母を同じくする兄阿濟格だった。

「全では亡き大汗の命じや」

ホンタイジは阿濟格と目をあわせることなく短くいった。

「それだけでは納得いきませぬ」

蒼白の形相をし、なおも食い下がる阿濟格にホンタイジは、
「黙れい、汝は今後、汝の母に仕えるか、それともこのホンタイジ
に仕えるか」

と最後通牒を下した。ホンタイジと阿濟格では兄弟とはいえ、年
が十三もはなれてい。今まで幾度かじかに接したことがあつたが、
それはあくまで兄貴分としての接しかたであり、今日ほど厳格なホ
ンタイジを見たことがなかつた。例え弟であろうと今日からは臣下
として扱うという、三十五歳のホンタイジの並々ならぬ覚悟がそこ
にうかがわれた。今まさにホンタイジは一人の武者から、一国の浮
沈を担う者へと変貌しようとしていたのである。

ホンタイジの決意を固いことがわかると阿濟格は、無念のあま
り地に額をこすりつけ、砂を血がでるほど握りしめ、そして嗚咽し
た。ホンタイジと周辺を固める護衛は、ゆっくりとその場を後にす
る。

結局鳥拉納喇氏とドルゴン、多鐸は石牢に幽閉され、さらに鳥拉
納喇氏の侍女達もことごとく別の場所に幽閉された。彼女等のなか
に、あのウランもいた。

「あらたまつた用事とは一体なんのことだ我が子豪格よ」

奴児哈赤にかわつて清寧宮の主となつたホンタイジのもとを、長
男の豪格がたずねてきた。豪格はこの年十八歳で、すでに?白旗の
旗主である。頑健な肉体をしており、戦場でも勇猛さを發揮し、
ホンタイジもまたひとかたならぬ期待をかけていた。

「実は一つお願いししたき儀があります
豪格の口は重かつた。

「どうしたのじや、はつきりと申せ」

椅子に腰かけたホンタイジは、息子のただならぬ様子をいぶかしんだ。

「実は助けていただきたい女子が一人おりまする」

やや口ごもつてはいるが、豪格の表情は真剣だった。豪格が助けたい女とはウランのことだった。その名がでたときホンタイジはいよいよ不思議なものでも見るような目で豪格をみつめ、やがて、

「詳しく話を聞こい」

と関心をしめした。

去年のことだった。豪格は山野に狩猟にでかけ、ついつい森の奥深くへと分け入りすぎ道に迷ってしまった。

「困ったことになったものだ、このままでは今日は野宿することになりかねん」

「」を片手にした豪格が困惑していると、ビリからともなく笛の音がする。

「かような山奥で笛の音とはめずらしい……」

好奇心にかられた豪格は、道に迷っていることも忘れ、笛の音のする方角に馬足をむけた。気がつくとあたりはまったくの闇である。やがて豪格は川の流れの前で笛を口にする一人の夫人を見た。夫人は鮮やかな桃色の旗袍に身をつつんでいた。

「すまぬ道に迷った者だ、城を通じる道を存ぜぬか」

豪格が声をかけると、女は背をむけたままで、

「私をお忘れになりましたか？ 貴方はホンタイジ様の長子で豪格様でありますよう

と軽く笑つてみせた。

「何故私の名を知っている」

と、いぶかしんだ豪格であった、振り向いた女の顔に見覚えがあつた。

「もしやそなたはウランか」

豪格とウランは三年ほどの間、顔を合わせたことがなかつたので

ある。

「いつかは私の命を救つていただきましたな。あのおりの恩はいまだ忘れておりません。城へ通じる道は私が知っております。まいりましょう」「う

ウランは十四歳、まだ幼女のあどけなさと、かすかな大人の色気が混同して、妖しい雰囲気をかもしだしてゐる。それからどこを彷徨つていたのかはっきり記憶にない。気がつくと豪格はウランの膝の上で眠つていた。豪格はこのとき初めて恋というものを感じた。むろん一夜かぎりのことである。

「恋か……」「いやまじこ」とよのう

話をひととおり聞き終わるとホンタイジは、かすかに憂いに満ちた表情をうかべた。

「父上、なんと仰せられた?」

豪格は今ひとつホンタイジの言葉の意味が理解できず、思わず聞き返した。

「いや、なに、それで汝は女の命を助けると申すのだな」「できれば嫁にむかえとうござります」

豪格がはつきりいと、ホンタイジはかすかに笑みをうかべ、「よからう、たかが侍女一人ぐらい生かしておいたとて国が傾くわけではあるまい。その女の面倒は汝が責任をもて」

「ありがたきお言葉!」

豪格は平伏していった。こうして両者は夫婦となつた。後年この両者には不幸な別れがおどずれることになるが、むろん豪格は、まだ知るよしもないのである。

「母上様、いつたいこれからどうなるのでござりますか」

と身動きも不自由な石牢の中で、鳥拉納喇氏に問いただしたのは多鐸だった。すでに牢に入れられてから三日、外の情報は一つも伝わつてこない。むろんまだ十三歳の多鐸に、政^{まつりいと}とは一体なんである

か、考えも及ばない。

ドルゴンは最初ショックで動転していたが、生来の聰明さから、己が今おかれている状況を、必死に把握しようとした。むろん、十五歳のドルゴンの到底理解の及ばぬことであった。ただ己の母が父の愛を失つたか、もしくは愛を失うような何事かの過ちをおかしたことだけは、おぼろげながら理解できた。いずれにせよ、今までの人生を父母の愛のもと順風に歩んできたドルゴンとつて、突きつけられたあまりに過酷な現実だった。

すでにドルゴンの生殺与奪の全ての権限は、二十歳年上の兄ホンタイジに握られている。そしてこの時から実に長きにわたり、ドルゴンの命運の全てはホンタイジに委ねられることとなる。ドルゴンが全てを理解するには、まだあまりにホンタイジという人物を知らなすぎた。

鳥拉納喇氏は、むろん己が犯した過ちを語つて聞かせるわけにはいかない。語つたとて、幼い子等に全てを理解できるか否か……。いやドルゴンなら今は理解できなくても、ゆくゆく理解できるかもしれない。だが、もしせめて子等だけでもここを無事脱出できたとして、ゆくゆく奴兒哈赤にかわつて大汗の位につくであろうホンタイジという男を、子等がどう思つであろうか。ホンタイジとて、二人の子等に対し容赦はしないであろう。しばし鳥拉納喇氏は、ホンタイジの鋭い目が今まさにそこににあるかのような錯覚を覚えた。そして一人から質問攻めにされるたび、返答に窮し困惑するばかりだった。

「誰じや」

かすかに木漏れ日がさす石牢の中で、鳥拉納喇氏は外の世界に数人の人の気配を敏感に察して声をあげた。扉がゆっくりと開く。騎乗した三人の武者が鳥拉納喇氏を見下ろしていた。武者達は一斉に下馬して片膝をつく。

「今日は我ら、我らが主の意思を大妃様に伝えるため、はるばるま

かりこしたる次第。单刀直入に申し上げる」

ホンタイジの使いの者らしい武者は、なにかを振り払おうとするかのよつこ、はつかりとした声でいった。鳥拉納喇氏は思わず息を飲んだ。

「我らの用向きは、今日我らが主より大妃様に死を賜ることござります」

この時、鳥拉納喇氏は胸中奥深くにあるなにかが氷解していくかのような感覚におそれ、子等の前では決して見せまいとした涙が、知らぬうちに頬をつたうこととなつた。

「さつながら、一人の御子息におかれましては、一命を救われるようことに達しにござれば」

「なんと、おまえ達母君を捨てて、我等にだけ生きよと申すか」

「待ちなさいドルゴン」

ようやく涙をふいた鳥拉納喇氏が興奮したドルゴンを制止し、しばし思いつめたように沈黙した。

「いいでしょ、連れていくなさい」

と無念を押し殺しながらも、鳥拉納喇氏は決心した。

「なんと仰せか母者、母者が死ぬなら自分もここで死にまする」

「なりませんドルゴン、わらわの命運がここで尽きたとて、そなたらが生きている限り、わらわは死なぬ。わらわが生きたかつたぶんだけ、そなたに生きてほしいのじゃ」

「ならば母上、これにてお別れにござるか……」

ドルゴンはかすかに唇を噛みながらいつた。

「よいかドルゴン、多鐸は氣の弱い子じや、面倒をしつかり頼むぞ」

鳥拉納喇氏はかたわらの多鐸の方角にかすかに目をやつた。

「母上、もう会えぬのでござりまするか

多鐸は短くいふと、かろいじて涙をこらえた。

やがて二人はホンタイジの使者に伴われて、薄霧の中に消えてい

つた。馬のひづめの音が完全に途絶えた時、鳥拉納喇氏は今一度声を殺して嗚咽した。ホンタイジの使いの者のうち一人が、まだ片膝をついたままだった。

「こなたはわらわの命を奪つたため、ここに残つたか」
武者は無言のうちに立ち上がり剣をぬいた。そして正座した鳥拉納喇氏の頭上高く構えをとる。鳥拉納喇氏が覚悟を決めた次の瞬間思いもかけぬことがおこつた。突如として武者は鳥拉納喇氏に背を向け、剣を逆さに持ち直し、先端で牢の壁を叩き始めたのである。二度、三度繰り返した時鈍い音がして、なんとそこに抜け穴が出現した。

「我が主の密命にござれば、大妃様が、もし命がほしいと申されるなら、この穴より逃げのびさせよと仰せでござつた。なれど拒まれるなら最早せんき」と

武者の眼光が瞬時鋭く光つた。

「ほほほ、随分と見くびられたものよのう。こなたがもしわらわの立場ならなんとする。ここから逃げ延びて、山野を鳥や獸のじとく生きるを潔しとするところか」

「それは……」

「遠慮はいらぬ、夢々わらわが見苦しきふるまいをしたなどと、こなた等の主に伝えてはならぬぞ」

「後悔なさらぬな」

武者はいま一度念を押すと、再び刀をかまえた。鮮血が武者の鬼の形相を朱に染めたのは、次の瞬間のことだった。

その夜、ホンタイジは寝所で女のすり泣く声で目を覚ます。

「誰じや」

ホンタイジは叫んだが、声だけで姿が見えない。その時であつた、壁にかけてあつた掛け軸に目をやつたホンタイジは思わず仰天した。なんと泣いていたのは、掛け軸に描かれている水浴びする天女だったのである。

不意に何者かの気配がした。ホンタイジは床に己以外の何者かの影があることに、さらに驚愕した。見覚えのある影だった。

「大妃、我を恨むか、そなたに思いを寄せたはわしの不覚、そなたに死を賜りしは國のため、汝の子等のことなら案じるに及ばん」

ホンタイジはかすかに震えた声で叫んだ。

「ほほほ、なれど汝はわらわから全てのものを奪つた。いずれ後悔する時がくるといつもの」

ホンタイジは思わず剣を振るつたが、悪靈はすでに消えていた。これが両者にとり今生の別れとなつた。

鳥拉納喇氏」と阿巴亥、すなわち孝烈武皇后は、わずか三十八歳にして散つた。ドルゴンは父奴兒哈赤に続き、母までも失い、弱冠十五にして孤児として取り残されることとなつたのである。

瀋陽・故宮の鳳凰樓、ここに現在も清朝歴代皇帝の肖像画が飾られている。むろん後に太宗といわれる事になるホンタイジの肖像画も含まれている。太宗・ホンタイジは奇妙なほど瞳が小さく、そして色白だった。そして全体としてふっくらとした顔立ちをしていた。ちょうど隣に飾られた父・奴兒哈赤の肖像画から、いかにも叩き上げの軍人を思わせる風格、ある種の頑健さ、意思の強さが伝わってくるのと比べ、どこか育ちの良さが感じられる。

かといってホンタイジはむろん、ただの凡庸な二代目ではない。その才是軍事より内政面に發揮され、一個の統一體となつた大金国をまとめあげる、守勢の時代の難しさを体現する存在だったといってよい。つぶらな瞳の奥に一匹の虎が眠つていてことを、まだ多くの者は知らずにいる。

死を免れたドルゴンは、改めてホンタイジという人物とじかに接することとなつた。ホンタイジは椅子に深く腰かけ、上段からドルゴンを見下ろしていた。

「母上は氣の毒なことをした、なにぶん亡き大汗の命じや、何人たりとも異をとなえることかなわぬのでなあ」

とホンタイジは最初にドルゴンの胸中を察した。

「何故でござりますか、何故母上は命まで奪われねばならなかつたのでござりますか」

ドルゴンの言葉に無念さがにじんでいる。ホンタイジの表情がかすかに曇つた。

「ドルゴンよ汝はすでに妻を娶つておるそつじやな。そなたは妻をどう思つておる」

ドルゴンはすでに十三にして妻を娶つておる。一般に女真族は早婚で決して珍しいことではない。相手はモンゴル・ホルジン部の出

自で、年はドルゴンとさして変わらなかつたといわれる。なぜモンゴルかといふと、やはりかつてチンギス・ハンの時代大帝国を築いたことと関連がある。この時代すでにかつての勢いを失つたとはいえ、騎馬民族の世界においてモンゴル族は、一段高い貴種と見られていたのである。

「愛おしいとおもいます」

ドルゴンはしばし考えた後、短くいった。むろんドルゴンもまだ若すぎる。妻を娶つたといつても実感が薄く、人並みの容姿ではあるが、無口でやや才気にかける若妻に、燃えるような恋慕の情をもつたわけでもない。他に答えがでなかつたのもせんなきことであつた。ホンタイジはそれを見抜いていた。

「若いそなたにはわからぬか。亡き大汗はの己が身が滅びるとともに、大妃の命をも望んだのじや、死してもともにありたいと申してな、己が亡き後、他の何人の手にも委ねたくないと仰せられてのう。それが亡き大汗の思いじや。ただいきがかり上、わしは汝と汝の弟をも幽閉したが、汝等には生きてほしいとも仰せであつたわい」

そこまで聞くドルゴンは、

「不条理にござりまする。世にかような理不尽なことがありますようか」

と無念を押し殺し、かるうじて声をだした。ホンタイジもまた、その光景を目にしながら胸をしめつけられるような感覚におそわれていた。

「いざれにせよ父は、こなたがゆくゆく国の命運を左右するやもしれぬと仰せであつた。こなたは生きよ、そしてやがてはわしの片腕となれ。母のことは忘れるのじやよいな」

そこまでいふとホンタイジは足早に身を翻して、場を立ちさつてしまつた。残されたドルゴンは、息を殺しかすかに嗚咽せずにはいられなかつた……。

やがて奴兒哈赤の葬儀が、チベット仏教の儀礼にのつとり肅々とおこなわれた。そしてホンタイジの即位の大典、むろんダイシャン等ホンタイジの年上の兄達もそろつてホンタイジの前に膝をつく。もちろんドルゴンの姿もあった。年号も翌年より天命から天聰に改められることと決まった。だがドルゴンの心中では母との別れ以来、全ての時間が止まつたままだつた。全ての事象が、まるで夢の中にでもこるかのように通りすぎていく……。

即位の式典を終えてほどなく、思わぬ客がホンタイジのもとを訪ねた。他ならぬ袁崇煥の使者だつた。

「ここに通すがよい」

ホンタイジは内心の不快感を殺しながら命じた。やがて袁崇煥の使者数名が、貢物を持参してホンタイジの前へ姿を現す。貢物は多額の銀、そして鮮やかな絹織物などである。国力を示してこれから始まる交渉を有利に進めようとする計画であつた。

「今日は我等、我等の主の祝いの言葉を伝えるため参上した次第」使者は軽く頭を下げ、少々皮肉めいた口調でいった。

「用向きを申してみよ」

ホンタイジはややうるさそうな様子でいった。

「されば、今貴国は危急の時にあります。先君が亡くなられ日が浅く、我が國のみならず東の朝鮮、西の察哈尔（モンゴル人の国）も虎視眈々と機を窺つてござれば、三方敵に回すは得策とは申せませぬ。ここは一旦我らと和平の道を探り、朝貢の実を取るが得策と存じるがいかがか？」

「我等に和解に応じよと申すか」

ホンタイジの眉が険しく動いた。

「我が国土は広大、物資は無尽蔵、我が国がその気になれば百万の大軍をよつするも不可能ではござりぬ。もし我等が察哈尔、朝鮮と手を結ぶべきとなることになるか

使者はあくまで強気である。

「かつて宋の御世、貴殿等女眞の国は、北のモンゴルそして宋によつて南北より攻められ滅亡のやむなきに至りました。同じ過ちは一度繰り返すべきではないと存するが」

使者は表向きは穏やかに口上を伝えたが、その一方、新たな大汗として即位したホンタイジの器量を窺おうとする様子が、ありありと見てとれた。

「さてさてそれはいかがなものかな、確かに貴国は大国、我等は小邦にすぎぬやもしれぬ。なれどかつて漢の高祖は匈奴を討伐せんとして果たせず、唐の太宗は突厥の前に一度は膝を屈した。宋は遼、そして我等が女眞の国によつて国土の大半を奪われた。貴国は所詮文弱の国、我等なら一人でこなた等の国の兵卒十人は相手にできるものと存するがいかがかな」

使者は少々驚きの色を浮かべた。蛮族の王とばかり思つていたホンタイジが、歴史に対して一通りの知識をもつていていたからである。「こなたは先刻、今我が国が存亡の危機にあると申したが、それはこなた等の国にもあてはまるのではないか。宫廷では宦官が政治の実権を握り、皇帝は耳目をふさがれたも同然。民は飢え渴き、土地を捨てて逃亡する者後を絶たぬと申すではないか」

使者の額に脂汗が浮かんだ。足元を見透かされた焦りから来るものであつた。しばし両者の間に沈黙があつた。やがて、

「よからう、和平のことホンタイジしかと応じたと、こなた等の主に伝えるがよい」

と、ホンタイジはやや重い声でいった。使者にかすかに安堵の色が浮かんだ。

「ただしこれだけは申しておぐ。かつて我が女眞の国は宋と手を結び、遼を陥れんと欲した。あのおり宋は我等との約定を反故にし、眞偽に反するふるまいに及ぼうとした。故に我が女眞の国は宋の皇帝を虜とするのやむなきに至つた。もし汝等に眞偽に反するふるま

いあれば、我等ただちに北京を陥れ、再び皇帝を虜とするであらう。
その儀、こなた等の主にしかと伝えるがよい」

「しかと……伝えまする」

しばしの沈黙の後、使者もまた重い声でいった。使者はその日のうちに足早に瀋陽を後にした。

ドルゴンは兄阿濟格等とともに、全ての身分を剥奪された母烏拉納喇氏の密葬をしますと、思わず天を仰ぎみた。

『いつまでも、悲しんでばかりいはいけませぬドルゴン』

どこからともなく母の声がしたようで、ドルゴンは我に帰つた。

「天の彼方へ……」

ドルゴンはぼそりと一人ごとをつぶやいた。

「兄上、これから一体どうなつてしまつのですか

たずねたのは多鐸だった。

「有為転変こそ世のならい。人はいつ母上のように不慮の事態に巻き込まれるやもしれぬ。なれど世にあるものは最善を以すより他あるまい。あの天の彼方へ赴く時まで」

かたわらで様子を見守っていた阿濟格は、かすかに驚きの色をうかべた。もともとドルゴンは早熟だとおもつていたが、悲しみを乗り越え、さりに心が一回り成長したように思えたからである。

ドルゴンは眼光はまつすぐに遠くをみつめていた。やがては曇りなき天へ……。この日、遼東の空は奇妙なほど澄みわたつていた。

中国四千年史は王朝交替の歴史である。政権運営能力を失った王朝は、新たに有徳で力ある者にとつて代られるというのが、有名な易姓革命の論理である。むろん易姓革命なるものが実行されるためには、多くの流血が伴うことになる。中国の各王朝の正史を一読すると、まず目を覆いたくなるのが極度の人口大激減の記録である。例えば前漢の初期の人口調査では約六千万いた人口が、前漢末の混亂を経て後漢が成立する頃には、二千万まで減っている。これと同じことは他の王朝交替期にも大なり小なりおきている。

人口大激減の原因是、一つには王朝の力が衰えてくるとともに、辺境での北方遊牧民等との抗争が激しくなり、結果多くの成人男子が兵士として出征を余儀なくされ、農村が人手不足に悩まされたことである。主要な働き手を失った農地は荒れ放題となり、各地で飢饉が発生する。そして食料がとぼしくなると、イナゴ等の昆虫は天を覆うほどの群れで作物を荒らすので、もともと乏しい食料はさらに乏しくなるのである。さらにここに水害や日照りが重なると、一度に数十万から数百万の人間が消えることも決して珍しくないのである。

明朝末期という時代もまた、民・百姓にとり生き地獄に等しい時代であった。俗にいう万曆の三大征、北方での女真との攻防、さらには万曆帝の度を越した奢侈等により、明の国庫は空になり、そこへ中国全土を深刻な飢饉が襲つた。

こうした中、北京紫禁城を揺るがす事態が勃発した。天啓七年（一六一七）、明朝第十六代皇帝天啓帝崩御、わずか二十三歳だった。代わつて泰昌帝の第五子すなわち天啓帝の弟にあたる由檢が崇禎帝として即位した。まだ十七歳である。

新帝が治世になつたとはいえ、政治の実権は依然として宦官であ

りながら東廠のトップでもある魏忠賢と、天啓帝の乳母で魏忠賢の政治上のパートナーともいいうべき客氏ににぎられており、若い皇帝の出る幕はない。崇禎帝は明の他の多くの皇帝がそうであつたように、生来資質そのものに問題があつたわけではない。あれいは平時であれば名君であることも可能だつたかもしれない。しかし生まれた時代が悪かつた。

時あたかも明朝を創業した太祖・朱元璋の生誕から、ちょうど三百年の歳月が流れようとしていた。極貧の乞食坊主から身を興したといわれる偉大な創業者朱元璋は、同じ庶民出ということで、しばしば漢・高祖と比較されることがある。自らが一個の無能体で、ながら臣下を縦横に使いこなした漢・高祖などとは異なり、朱元璋は自らが優秀な将であり、知識人であり、また偉大な政治家であった。暗君続きの明朝がまがりなりにも三百年の命脈を保つたのは、ひとえに創業者に明太祖のような傑物をえたからであつたといわなければならぬ。

かつて宦官鄭和をして、コロンブスの新大陸発見にさえ先んじて、アフリカ東海岸にまで艦隊で到達した大国明。衰えたりとはいえ後二十年ほどで、紫禁城そのものが天下争覇の舞台にならうとは、恐らく年若い皇帝も、宫廷の百官達も、いや天下の民も予想だにしていなかつただろう。

さて天下の民草の苦しみをよそに、紫禁城は表向きはのどかな日々が続いていた。紫禁城の西に北海・中海・南海の三つの池水が連なつて、俗にいう「三海」を構成している。三海の歴史は古く、金代にはすでに宫廷人の行楽の地だつたといわれる。新帝が即位してまだ間もないある夏の暑い日、北海に浮かぶ一隻の龍船があつた。今をときめく客氏と、客氏に仕える宮女と大勢の宦官を乗せた船だつた。かつて元の頃、最後の皇帝となつた順帝が、巨大な竜頭をかざした船を北海に浮かべたという伝承を客氏が耳にし、夏の暑さを

すこしでも和らげる余興として、自らも龍頭をかざした船を建造させたのだった。むろん長さ一六〇メートルもあつたという順帝の船には、到底及ばない規模ではあった。

四十半ばの客氏は全身真っ赤な衣装を着て、宮女達に巨大な扇子であおがせ、濃い化粧のせいで年齢より多少は若くみえる。

「暑いのう、こう日夜暑いと肌も荒れてかなわぬ」

客氏はため息まじりにいった。

「わらわは夏は苦手じゃ、この北京は涼しい季節がやはり最もよい」確かに、かつて元の時代には蒙古族は夏の暑い盛りだけは、長城の外の開平府に小型の都城を建設しそこに移り住んだといわれる。北京の夏は決して過ごしやすくはないのかもしない。客氏がうんざりしていると、宦官のうちの一人が卓の上に巨大な西瓜を用意し、「恐れながら、德州（山東省）の西瓜にござります」

とうやうやしくいった。そのとき客氏は、

「待て、その西瓜はもしや腐っているのではないか」と疑念をもつた。包丁を入れると果たして西瓜は腐っていた。

「無礼者！」

客氏は宦官めがけて腐った西瓜をぶつけた。腐敗した汁を顔中に浴びた宦官が、平謝りして客氏の元を去つたその時異変はおきた。突如として船が激しく揺れた。池の中に潜んでいる何者かが船底に穴を開けたのである。この事故で客氏はかろうじて一命をとりとめたが、多くの宮女と宦官が溺れ死ぬこととなつた。さらに客氏自身も数日熱にうかされるはめとなつたのである。

やがて魏忠賢を頭とする東廠による調査が開始され、下手人のめどはあらかたついた。あまりの権勢ゆえ数多くの敵をもつ客氏と魏忠賢は、この際怪しい者は徹底的に根絶やしにしようとはかつた。客氏の身辺の世話をする宦官のうち一部の者が突如呼び出されたのは、ようやく客氏が健康を取り戻し始めた時分のことだった。

「皆に集まつてもらつたのは他でもない。実はこの中に先日わらわ

の命を奪わんとした不届き者の一味がある」

密氏の言葉に場内は一瞬緊張がはしり、それぞれが近辺の者の顔を疑り深く見回した。

「すでに怪しき者の名はあがつておる。その者の食事には毒を入れておいた。一口食するだけで悶絶することであらう。己の心に一点の曇りもない者だけがはよう箸をとるがよい」

密氏にうながされて、宦官の多くが用意されていた食事に手をだした。ところが三人だけ箸をとるのをためらう者がいた。

「どうした何故箸をとらん」

かすかに密氏の言葉の奥に底意地の悪い響きがあつた。宦官のひげのない表情に次第に脂汗がうかびはじめた。

「案ずるには及ばん。そもそも毒など最初から入つておらぬからう」

その少し年老いた宦官ははかられたと思つた。命はもはやなきものと思つたのか、突如として懷に隠しもつていた匕首をとりだし、

「國賊覺悟！」

と叫んで、密氏の命を奪わんとした。だが匕首は密氏にとどかなかつた。不意に東廠が部屋に乱入し、三人をとりおさえたからだつた。

凄惨な拷問が始まつた。数日その後三人のうち一人が自らが崇禎帝のもとからつかわされた密偵であることを自白した。だが肝心な竜船沈没の一件に関しては関与を否定し続けた。

他の者は口を割らなかつたが三人の末路は哀れだつた。命を奪われた上、肉を細かく切り刻まれ、皇帝の食卓に希代まれにみる珍味として陳列されたのである。むろん皇帝は魏忠賢のある種の恫喝行為に言葉を失つた。その場にいた宫廷の百官の中にも、あまりのことであつたため嘔吐してしまう者までいた。

若年の皇帝にも自らの手で傾いた王朝を立て直したいという氣概だけはある。そのためにはなんとしても 魏忠賢一派を取り除かな

ければならない。皇帝は悲壯な思いを固めなければならなかつた。

父を魏忠賢の弾圧で殺された清初の学者黃宗羲はいつ。

「宦官の災いは漢唐宋を経てやむ時がないが、明に至つてはその激しさを極めている。漢唐宋では朝廷の政治に関与する宦官はいたが、宦官に奉仕する政治は存在しなかつた。然るに明においては、大学士（宰相格）も中央官庁も、宦官奉仕のための機関になりさがつてしまい、天下の財も、天下の兵も、すべてが宦官のための存在と化してしまつた」

史上空前の宦官王朝とでもいつべきであろうか、自らを聖人孔子に匹敵すると豪語した魏忠賢こそ、ある意味明王朝の象徴的存在であつたかもしれない。だがその魏忠賢にも落日の時が迫つていた。

ある夜、食事を口にした皇帝は突如苦しげなうめき声をあげ、たちちに寝室に抱きこまれた。ほどなく医師がよばれ、他の者は部屋から退去することとなつた。

「陛下、苦しゅうござるか？」

医師が一声かけると、崇禎帝は何事もなかつたかのように寝床から起きあがつた。

「案ずるな偽りの病よ、余は先々帝とはわけが違うぞ」

医師が驚くのを尻目に崇禎帝は、

「給仕を司る宦官に魏忠賢の息のかかつた者数多あつたであらう」と一言いい、かすかに笑みさえもらした。医師が瞬時、年若の皇帝に並々ならぬ覚悟のほどを読みとつたのは、まさにこの時であつた。

時を経ることなく魏忠賢一派の給仕を司る宦官達が捕らえられ、牢に入れられた。この動きに魏忠賢と長年対立関係にあつた東林党といわれる士大夫の集団が同調した。彼等の助勢も得て皇帝は、魏忠賢を皇帝に毒を盛つた疑いの他に、十の罪をもつて弾劾したのだった。十の罪とは、

- 一・皇帝と並んだこと
- 二・皇后を酷く扱つたこと
- 三・先帝をきちんと祭らなかつたこと
- 四・皇族の土地を勝手に削つたこと
- 五・聖人と名乗つたこと
- 六・爵位を乱発したこと
- 七・民を苦しめたこと
- 八・満州方面での軍功をおさえたこと
- 九・臣下と皇帝の間に立つたこと
- 十・兵事を弄んだこと

といった内容である。半ばいいがかりに近いものも多いが、天啓帝という後ろ盾を失つた魏忠賢には、もはや逆らいつゝとはできなかつた。魏忠賢はついに牢に入れられたのである。

数日すると皇帝の使者を名乗る者がやつてきた。

「魏忠賢よ、こなたの疑念は半ばとけた。あとはこなたがこの書類に、決して朝廷に対し「心なきことを誓う署名をえすれば、汝はこの牢からでられるであろう。あとは皇帝次第だ」

魏忠賢は書類に目を通しはしてみたものの、文盲なのでなにが書いてあるのかまったくわからない。ただ藁にもすがるような思いで、よつやく覚えた自分の名前を書類に書き込んだ。ところが使者のいうことは偽りだった。そこに記されていることは身の潔白どころか、自らの容疑を認めいかなる刑をも甘受するという内容だったのである。哀れな魏忠賢は鳳陽という場所に流罪となつたのである。

時を同じくして密氏もまた捕らえられた。密氏は鞭打ちの後、木馬の刑となつた。

下半身を裸にされたうえで木馬に乗せられ、両腕を後ろで縛られ、縄で天井より吊るされる。すべての体重が股間に掛かることになり、

凄まじい苦痛となつた。特に陰部に加えられる苦痛と羞恥は想像を絶していた。客氏はついには下腹部から血を滴らせ、悶絶して果てたのである。

「水……水をくれ……」

蠅燭の灯火だけがかすかに暗い部屋を照らしていた。魏忠賢は言語に想像だにできない苦痛で、数日意識朦朧とした中をさまよつていたのである。

眼前に初老の男が水瓶を持って立つていた。

「今一度申しておぐが、くれぐれもわしを恨むなよ。こなたが好んで去勢の道を選んだのじやからのう。こなたの傷口には白蠅の棒が入つておる。水を飲めば尿の道を閉ざす。棒を抜けば肉が盛り上がりつて小便の道を閉ざす。いずれにせよお前さんはあの世いきじや」「構わぬ……もはや生きたいともおもわぬ……」

老人はなおも冷たい目で魏忠賢を見おろしていたが、やがてあきらめたかのように、水を口にふくませた。しばし後、忠賢は安堵したかのような表情をうかべる。

「哀れな奴よ、せめて今際の際くらいは富貴を得る夢にでも出会えるといいが……」

老人は静かに目を閉じた……。

「まだ生きておつたのか……」

忠賢は流罪となつた鳳陽にある粗末な家屋で、悪夢から覚めた。去勢して以来幾度同じ悪夢に苦しめられたことであろう。いまだ口が肉体が世にあることに忠賢は、ある種のおかしみがこみあげてきて、ついには声をだして笑つた。だが共に流罪となつた他の宦官が客氏の死を伝えると、じばし沈黙しその魏忠賢も瞑目せずにはいられなかつた。

「あれいはわしは富貴を得る夢を見ていたのやもしれぬ。だがもう終わりか」

時にまだ元号改まらず天啓七年（一六一七）十月、榮華を極めた
魏忠賢はついに首を吊つて果て、一族も「ことく滅ぼされた。魏
忠賢は六十歳であった。

ここに理想に燃える崇禎帝による新政が開始された。だが新帝は
まだ知らずにいる。己が中国史上で最も不幸な星の巡り合わせに生
まれた皇帝であるということを。

さて新たに大汗となつたホンタイジの最初の大仕事は、朝鮮攻略となつた。李氏朝鮮の仁祖・李？は、金側からホンタイジの即位を通達したにも関わらず、一人として挨拶の使者を送つてよこさなかつた。自ら小中華を名のる李氏朝鮮にしてみれば、女真族などというものは、所詮蛮人の集まりにすぎず、宗主国として朝貢を要求するなど片腹痛い話しでしかなかつたのである。もちろんホンタイジにしてみると、朝鮮の無礼を放置することは国の対面にかかわる。

実際に朝鮮王朝攻略の主力部隊を構成したのは、？藍旗の阿敏と弟の済爾哈朗ジルガランの部隊。代善と二人の子供等からなる？紅旗の部隊であつた。そしてドルゴンは、兄、阿濟格の正黃旗の部隊の一翼を担当こととなつた。もちろんドルゴンにとり、初めての本格的な戦闘であつた。

女真の部隊は怒濤の勢いでたちまち鴨緑江に達する。ここを越えれば朝鮮国である。だが想定外の異常な寒波のため、行軍はここで一旦滞ることとなる。

「今日はここで野営する。だがここはもはや敵地も同然、くれぐれも油断だけはするな」

全軍を統べる代善が威厳のこもつた声でいうと、それぞれの部隊ごとに野営の準備にとりかかるため一旦解散となる。

「待てドルゴン、そなにはおりいつて話したいことがある」

最後に残り一礼して代善のもとを去ろうとしたドルゴンは、不意に呼び止められ何事であろうといぶかしんだ。代善とドルゴンでは兄弟とはいえ年に相当なひらきがあるせいもあって、今まで親しく交流などしたことはなかつた。ドルゴンがかすかに驚きの色を浮かべたのも、いわば当然のことであつた。

「こなた今は亡き父上の遺言により、こなたの母を失うはめになつたそうじゃな」

ドルゴンは瞬時とまどつた。というより心の奥深くうずめようとしている、自らの母の無念の死という痛恨事が再び脳裏をよぎり、一時不快の念を隠しとおすことができなかつた。

「さぞかし父上を恨んでいるであろうのう」

「いえ、決してかようなことはござりませぬ」

ドルゴンにしてみれば他に返答がうかばない。

「隠さずともよい。わしもかつて一度だけ父を深く恨んだことがある」

一体なんのことなのかドルゴンには、むろん想像もつかない。代善がドルゴンに語つて聞かせたのは、奴児哈赤の第一子にして、代善にとつて母を同じくする兄？英の物語だつた……。

?英は勇猛だつた。武勇だけなら弟達の何人たりとも及ばなかつたかもしれない。だが強すぎる一方、寛容さがなかつた。時に他の兄弟達につらくあたることもあり、またかつて奴児哈赤のウラ部討伐に同行した際は、降伏した敵を騙し討ち同然に皆殺しにしてしまつた。奴児哈赤の許しをえないこの虐殺に、奴児哈赤は語氣を強くして?英を叱責した。?英は初めて心から父を憎悪した。そして奴児哈赤の留守をみはからい、天と地の精靈を祭つて父を呪詛するという暴挙にでたのである。

事は明るみにでて、ついに?英は幽閉されるに至つた。そして代善が奴児哈赤から与えられた任務それこそは、?英に死を賜ることだつたのである。

やはり凍てつくような冬の闇夜のことだつた。代善は父である奴児哈赤より、?英に死を賜るという重大な任務を負い、?英の幽閉されている粗末な小屋を目指していた。すでに?英は病の身となつており、代善の訪問をオンドルの上に身を横たえて出迎えなければ

ならなかつた。かつての勇者の面影はすでにはない。だが不意の弟の来訪に？英はからうじて立ちあがつた。そしてまた苦しそうに咳をするのだった。

「覚えておるか代善、我らがまだ幼かつた頃、はるかはるか高い山の頂上まで登れば、あの星を手にとることができる。そう信じて雪の中を山頂を目指した時のこと？」

「兄さんもちろん覚えているよ。一人で遭難して途方にくれて、遠くから響いてくる狼の遠吠えが、どれほど恐ろしかったことか。洞窟で一夜明かして、もし嵐がやまなければ一人とも死んでいた」

「だが俺はまだ星を欲している」

そこまでいふと、？英は苦しそうに顔を歪めた。

「兄さん、あまりしゃべらないほうが……」

「父が申した寛容さとはなんであるのか、この一年の間ずっと文殊菩薩に問い合わせきた」

？英の視線の先に、代善の背丈ほどもある文殊菩薩像があった。代善がしばし菩薩像のなんともいえぬ氣高さに、奇妙な安堵感をえていると、不意に驚くべき事態に直面した。菩薩を見つめる？英の目に涙を見たのである。戦場ではまさしく鬼だつた兄？英、己が情弱に陥つた時、厳しそうるほどであつた兄？英。物心ついた時から兄は涙などとは最も無縁な存在としか思つていなかつた。その兄が落涙した。代善は兄の心に悟りすました何事かの心境の変化を見た。

「文殊菩薩はいかな罪を犯した者も慈悲の心で包むといふ。だが俺は誠に文殊菩薩の慈悲にあやかることが許される人間であるのか否か、来る日も来る日も考えた。己にできることといえば武芸のみ。故に俺は文殊菩薩の前で剣舞を舞つた。来る日も来る日もだ。そしてある夜のこと奇跡はおきた。突然、文殊菩薩がまばゆい光をはなつたのだ。俺は剣を捨てて一步、二歩、文殊菩薩のほうに歩みよつた。菩薩の手が優しく俺をつつみこみ、ゆっくりと俺の汗をぬぐつたのだ。じばし俺の心を一筋の光明がよぎつたのは、まさにその時

だつたのだ

代善はしばし呆然として、英の言葉に聞きいつていったが、すぐに
我に帰つた。この兄に死を賜る。恐らく生涯忘れる事はないだろ
う。しばし代善は兄を顔をまつすぐに見つめた。

「俺は先刻からお前の常ならぬ様子に気付いていた。お前は今日、
父の命により俺の命を奪いにやつてきたのである」「う

胸中をいいあてられ、代善はかすかに顔色を変えた。

「父に伝えてくれ、決して父を恨んでおらぬと。わしは愚かであつ
たが、今となつては父上のもとに生を受けたことを誇りに思つてお
る」と

代善は思わず強く拳を握りしめた。今この状況で、もし立場で逆
であつたら、むしろいかほど樂であるつかとしばし瞑目せずにはい
られなかつた。

「そしてついに兄君様の命を奪われたのですか」「

ドルゴンは代善の様子をうかがいながら、注意深くたずねた。
「いやわしにはついにできなかつた。あれいはかなわぬことと思ひ
ながらも、兄が止めるのも聞かず、今一度父のもとに命乞いに戻つ
たのだ。だが父は一部始終を聞くと血相をかえたのだ……」

「馬鹿者が！ 何故すでに覚悟し悟りすました者に死を賜らなかつ
た。せめて弟である汝の手で死を賜るが慈悲であるとこゝ、わしの
心がわからぬか！」

「恐れながら、父の申すことは人の申すこととも思えませぬ。我ら
は漢人達の申す狼や虎の「」とき者では「」ぞりませぬ。もしどうして
もと申すなら、兄のかわりに「」が自害いたします」

奴児哈赤はしばし沈黙した。椅子に腰かけた奴児哈赤は、そのし
ばしの間に拳を震わせ、唇を強く噛みすぎてかすかに血が滴つてい
た。次の奴児哈赤の言葉は代善にとつてあまりに衝撃的であつた。

「愚か者が、そなたがもしにこじで自害したといひで、？英がすでに世にないことに気付かぬのか」

代善はしづかし茫然自失となつた。

「あやつは誇り高き者、今そら命乞いなど欲しておらぬし、こなたがやらねば自ら命を断つ。あやつはそつ言つ者也」

代善はかすかであるが「口が犯した過ちに『氣づいた』。だが最早手遅れかもしけぬとも思つた。

「こなたは今、われ等は獸ではないと申したな。獸とて我らと同じこと。生まれし時より山河とともにあり、山河、すなわち世の天地精靈に育まれねば生をまつとうすることかなわぬ。わしが常々思うは我が命尽きる時、天地精靈に決して恥ずべきことなきよつといふことじや。わしとてかなうことなりば？英を殺したくない。だが天地精靈に誓い後ろめたきことあらば、私情をはむむ」とできぬ」

奴児哈赤はきつぱりといいきつた。

「こなたは？英を一度殺した。一度田は心を一度田は？英の肉体そのものをだ」

そのまでいふと奴児哈赤は再び拳をふるわした、無念の形相をうかべた。

「わしは再び兄のもとへ戻つた。果たして父上のおつしゃたとおりだつた。すでに兄は自害していたのだ。わしは冷たくなつた兄を抱いて、一晩中泣き続けた。悲しみが流れて決して止むことのない滝壺のようにこみあげてきた」

ドルゴンは沈黙したまま代善の話に聞きいつていた。

「わかるかドルゴン、父の心には常に我らが住まう山河があり、目に見えぬ天の意志を恐れてもいた。そして常々おおせられていたことは、人はただ世にあることだけが、生きるところことではないといふことじや。肉体が朽ちてなお人の心の中にある。それこそが真にこきることだと仰せられてのつ。

父上と汝の母の間になにがあつたのか、詳しことはむろんわし

にもわからん。なれど父の眞の意思は汝を生かすため母を殺した。
そして死してなおこなたの母を、己が瞳に焼きつけるため……」

一寸先の視界をも遮っていた雪と風雨がにわかにしずまつた。満月が眼前の鴨緑江の凍結した水面を鮮明に照射する。

「いざれにせよドルゴンよ、そなたは一刻も早く勇者にならねばならぬ。父上のためにもな。何故かわしにはそなたが、亡き我が兄に似ているような気がしてならんのじや」

そこまでいうと代善は馬にまたがり鞭をいれる。ドルゴンは代善が去つた後もしばしその場に立ちつくした。ドルゴンは亡き父をして代善という人物を初めて知つたのであつた。

翌未明風雨は止んだ。女真の部隊は凍結しきつた鴨緑江を渡り、李氏朝鮮の領土へと足をふみいれた。ドルゴンにとつて故郷を後にして初めて見る異国である。天の色、山河がおりなす空気までもがかすかに違うものにおもえてくる。だが感傷に浸つてゐる余裕などない。ドルゴンは一刻もはやく、代善のいう勇者とならなければならなかつた。

丁卯胡乱・朝鮮征伐（一）～ドルゴンの初戦

天聰元年（一六一七）一月、女真騎兵は雪崩のように朝鮮領内に侵攻を開始した。そして十七日には朝鮮北部・平安道龍川に達し、朝鮮の将帥毛文龍と干戈を交えることとなる。朝鮮側のいう丁卯胡乱の始まりである。

ドルゴンは思わず息を飲む。初めて知る戦場、眼下には李氏朝鮮の大軍が隊列を整え、戦闘開始の時を今や遅しと待ちかまえている。敵兵の放つ殺気が、平素より冷たい風とともに伝わってくるかのようである。ゆっくりと白い息をはきながら、最前列の兵が弓を構えて迫ってくる。

戦闘は朝鮮側の弓隊の一斉射撃から始まった。たちまちのうちに銀化粧した大地が血の色にそまる。弓隊が退くと続いて鳥銃部隊が女真側にしつかりと狙いをさだめる。

李氏朝鮮王朝は、かつて秀吉の朝鮮出兵のおり、日本側の火縄銃に歯が立たなかつた経験から兵器の改革を進め、この戦いにおいても多くの鳥銃を所持していた。

女真側は弓で応酬するも、さすがに鳥銃相手では分が悪い。緒戦の劣勢をドルゴンは歯ぎしりしながら見守っていた。

「早まるなドルゴン、戦いはまだ始まつたばかりだ」

正黃旗を束ねる兄阿濟格が、はやるドルゴンの胸中を察して声をかけた。

朝鮮の部隊は鳥銃部隊と弓隊が入れかわりたちかわり女真側に痛撃を浴びせた。やがて抗しかねたように女真の部隊は逃走を始める。ところがこれが罠だつた。追撃を開始した朝鮮軍を待っていたものは、雪原にぽつかりと開いた落とし穴だつた。たちまち前衛部隊が混乱に陥り、動搖が全軍に伝播していく。

「今ぞかれい！」

全軍を束ねる代善の号令一下、女真の誇る八旗の部隊が一斉に反撃に転じる。阿濟格率いる正黄旗の部隊もまた、敵中只中に突撃していく。むろんドルゴンも戦闘に加わった。こうなつてしまふと天下に精強をもつて知られた女真のハ旗に対し、もともと怯懦な者が多く戦闘意欲に乏しい朝鮮の部隊である。朝鮮側は分が悪い。鳥銃を保有している優位を生かすことができず、全軍が崩壊していくのに時がかかるなかつた。

ドルゴンはこの戦いにおいて、初めての戦いとは思えぬほど勇敢だつた。その存在を誇示することに成功したのである。だが試練はすぐにやってくる。

女真騎兵の無人の野を行くがごとき南下が始まつた。郭山・安州・平壤など各地で朝鮮軍を撃破、一月末には朝鮮の首都漢城にまで迫る。危機が迫り朝鮮の仁祖・李？は、三百年後に明治日本と李氏朝鮮との確執の部隊ともなる江華島へ避難。ここで女真側は思わぬ止めを食つ。女真騎兵は陸上で戦いには強大であったが、なんと水軍を持たなかつたのである。朝鮮の水軍は陸地に構えられた女真側の陣容めがけて、玄字砲・地字砲などの大砲を放つてくる。さしも女真の精銳部隊もついには指揮系統まで寸断され、非常に危険な状態へと陥つた。やがて雪の降りしきる中地上戦となつた。

「ええい何をしておる。これしきの戦いで負けるわけにはいかぬ」

血氣にはやるドルゴンは、阿濟格が止めるのも聞かず敵の只中に騎馬を進める。だが鉛玉と矢の嵐の中、さしものドルゴンも今まで感じることがなかつた、戦場の恐怖といつものを初めて味わうこととなつた。そしてついに銃弾が右肩を貫通し、ドルゴンは鈍い音とともに馬から転げ落ちる。かろうじて立ちあがつたものの、激痛のあまり思わず片膝を突いた。辯髪が激しく乱れた。不意にドルゴンの脳裏をよぎつたものは、奴兒哈赤と烏拉納喇氏の姿だつた。

「死ねない、俺はこんなところで死ねない。なんとしても俺は勇者にならなければ……」

苦しい息のもと立ち上がりしたが、次第に意識が遠のいていく……。次に田を覚ました時、ドルゴンは寝台の上にいた。田の前に阿済格が立っていた。

「俺はまだ生きているのか」

ドルゴンは、しばしの間、安堵と驚きの入り混じった複雑な表情を浮かべた。

「やつと田を覚ましたのか、三日間寝たきりだつたぞ」

阿済格もまた、かすかに安堵の表情を浮かべたが、次の瞬間には厳しい顔つきにかわった。

「いいかドルゴン、戦闘というものは、だた勇だけあればいいといふものではない。時に冷静に状況を把握して慎重になることも大事なことなんだ。お前に死なれては亡き母者に申し開きの言葉もないからな」

「己の不覚に言葉もないドルゴンは、ただうつむき、そしてまだこみあげてくる痛みを生涯忘れまいと誓つのだつた。

やがてドルゴンは、まだ完治しない右肩の痛みに耐えながら、軍議に参加することとなつた。席上ドルゴンは一言も言葉を発しなかつた。こじんなしかその場に集つた者等の多くが、戦場で不覚をとつた己をあざ笑つているかのように思えて、言葉もでにくかつたのである。ドルゴンは名誉を回復する機会を欲した。勇だけでない智将としての己に田を開くのは、ほゞなくのことであった。

丁卯胡乱・朝鮮征伐（一）～若き飛龍

李氏朝鮮と女眞の確執は、朝鮮の始祖・李成桂が豆満江下流域の女眞を平定した時代までさかのぼる。さらに四代目の世宗十六年（一四三四）からほぼ十年の間に、たびたび侵入を繰り返していた女眞を征討し、ここに慶源・鐘城・会寧・慶興・穩城・富寧の六つの鎮が置かれることとなつた。

これら六つの鎮では必要に応じて堡壘など防衛施設が設置され、軍隊が駐屯した他、南方から罪人などが強制移住させられ開拓が行われた。特に南方のすすんだ稻作技術が伝わったことにより、会寧・慶源・鐘城・穩城の朝鮮・女眞の国境沿いに広大な官屯田が出現することになる。

こうした朝鮮北方における稻作技術の進歩は、十六世紀に入つて極盛期をむかえる。十六世紀は、中国長江デルタ地帯の水利条件が格段に整備された時代でもあり、また日本でも大河川流域の開発が本格化する時期でもある。いわば東アジア全域で乾燥地の畑作から、湿潤地での稻作へのシフトが大規模に行われた時代なのである。

だが一方で女眞は相変わらず人口が極小で、狩猟・採取に頼る細々とした生活が進歩することなく続いていた。歴史上未開は常に文明を欲する。いわば女眞と朝鮮そして明国との対立は必然であつたといえるかもしない。

朝鮮と女眞の江華島をめぐる攻防は長期化していた。朝鮮側には各種大砲の他に飛撃震天雷といわれる兵器もあつた。震天雷は目標物めがけて発射される、いわば時限爆弾である。形状はひょうたんのようく丸く銃口は角ばつており、銃口には取つてのついた蓋があつた。丸い本体にねじ型の木谷と導火線の入つた竹筒を入れてから、筒の中間部にある穴に火薬を入れて使用したといわれる。爆発の際の衝撃音だけでも、女眞側を動搖させるのに十分で、乱戦の最中、

阿濟格は負傷し、以後正黃旗はドルゴンが事実上の将の役割を担うこととなつた。むろんドルゴンにとり初めての戦闘でのことで、将といつても半ば飾り物に近いものであつた。

実際に兵器を使用しての戦闘もさることながら、両国の間諜による諜報戦もまた活発で、女真側の間諜が敵方に侵入し帰還しないこともあります。朝鮮側の間諜が女真の陣地で捕えられることもあつた。そんなある日、一人の朝鮮側の間諜が、正黃旗の陣地で捕縛された。

「どうかお命ばかりはお助けくださいませ」

縄で縛られた朝鮮側の間諜は、女真の言葉でドルゴンに命乞いを始めた。手足をぶるぶると振るわせいかにも臆病な様子がみてとれた。

「こなたは何故われ等の言葉を話すことができるのだ」

ドルゴンがいぶかしみ尋ねると、朝鮮側の間諜は、

「実は何年か前、貴国との国境付近で、貴國の人狩りに身柄を拉致され、数年間奴隸として農作業などをしていた。隙を見て逃亡し、女真の言葉を知つたことから、今回間諜の役目を与えられたのだ」と以外なことを半ば震えた声でいった。女真の人間が朝鮮などから人を拉致して、半ば奴隸として扱つたことはまぎれもない事実である。人間を拉致して酷使するということは、むろん非人道的行為以外の何者でもないが、女真にしてみれば人口不足を補うための窮余の国策だったのである。

ドルゴンはしばし沈黙した。幼少の頃から驚くほど知恵のまわるドルゴンは、目の前の敵国の間諜を利用するてだてを考えた。間もなく間諜は縄をほどかれ、粗末な食事をあてがわれ、しばし監禁されることとなつた。

夜が訪れた。ようやく眠りにつこうとしていた矢先、間諜は突如として叩き起こされ、黄色に龍が描かれた正黃旗の旗が風にかすかになびく中、ドルゴンの待つ本營に通された。

「朝鮮国の諜者よ、実はそなたに頼みたいことがある。もし引き受けたなら、そなたの命まではどうん。なれど断ると申すならもはやせん無き」と

ドルゴンはかすかに剣に手を触れた。

「そなたの任務は、これから私が申すとおり、朝鮮国の言葉で手紙を書き、江華島にあるこなたの国の陣営にとどけることだ」

ドルゴンを取り囲む正黃旗の武者達からもかすかに殺氣が伝わつてきて、武者はしばしめためらつた後筆を取つた。ドルゴンの口上とは、

『敵方の正黃旗の部隊においては、大将自らが負傷し、戦意に乏しいため、明日深更夜陰にまぎれて平山方面に帰国する手はずとなつております。どうかこの機をのがれず、一隊をさしむければ、これを全滅せしむるはいとたやすいこと。敵の戦意を挫く絶好の好機と存じます』

間者は何故自分がこののような内容の口上を記せねばならぬのか、しかとしたことはわからなかつた。己にわざわざ自軍の機密を知らしめるため、自らの陣に戻れといふのか、それとも何かもつと深い何事かの理由があるのか。とにかく使者は命がほしいために、いわれるがまま朝鮮の言葉で手紙を書き終えた。

「うむ」苦労であった。ところで一つものを尋ねねよう。そなたにとってそなたの祖国とはいがなるものであるか

ドルゴンは一通り手紙に目を通した後、間者に尋ねた。むりんドルゴンに朝鮮の文字は読めない。

「愛しいものでござります」

間者はありきたりの言葉を口にした。

「命を捨てても愛しいか

間者はしばし沈黙した後、

「むりんござります」

とやや重い声でいった。ドルゴンの目がかすかに鋭くなつた。

「こなたは今、我らに對して利敵行為に及んだ。人として恥べき行為とはおもわなんだか」

しばし間者の額に脂汗がうかんだ。本能的の己の死を予感したのである。ドルゴンもまだ若いだけに正義感も多分にあり、敵国いわば裏切り者に対し容赦がなかつた。

「かように眞偽に反する者の顔など見たくない。はよう連れていき首をはねよ」

正黄旗の武者が一人両脇をかかえるようにして朝鮮の間者を連行し、間者は必死の命乞も空しく、悲鳴とともに白刃の餌食となつてしまつた。この時居並ぶ正黄旗の武将の多くが思つた。

『この方には間違いなく勇がある。ゆくゆくひとかどの人物になられるに相違ない』

やがて斬殺された武者の屍は海に流され、女真側と朝鮮側を隔てる水流を経て、江華島に流れついた。問題の書は、屍の鎧の中に隠された筒の中から発見され、朝鮮国王の目にも触れることになる。朝鮮側はこれを機会として軍議を開き、一隊を平山方面に先回りさせ、敵に一矢報いることとした。

その夜、朝鮮側の部隊は馬の口に牌を含ませ、嚴寒の中、正黄旗の部隊とおぼしきかがり火が灯る地点を目指した。

「今ぞかかるい！」

殺氣をおびた朝鮮の部隊が正黄旗の陣地めがけて殺到する。ところがそこに異変が待ちかまえていた。なんと陣地はもぬけの空で兵士一人さえ見当たらなかつたのである。この思わぬ肩透かしに朝鮮側に動搖が走つた。次の瞬間、周囲の山々から一斉に太鼓の音が響いた。謀られたとだれもが思つた。

山が震撼するほどの太鼓の音とともに、正黄旗の部隊が一斉に朝鮮側を取り囲んだ。その中にむろんドルゴンの姿もあつた。勇敢に戦うその姿は、さながら若き飛龍であつた。奇襲のはずが逆に敵の奇襲をうけるはめになつた朝鮮の部隊はもろくも崩れ、落ち武者が

我先にと逃げていく。

それはドルゴンにとり生涯初めての大勝であった。いわば敵の間謀を利用して一計を案じたのであった。智将としてのドルゴンの面目躍如たるものがあった。

この後、女真側は朝鮮義兵に背後を突かれるなどを恐れ決戦に及ぶことができず、一方朝鮮側も仁祖・李？が長期化の様相を以ていた戦いに疲れ和を求めたことから、女真側を兄、朝鮮を弟とすることにより講和が成立した。だが朝鮮との争いは後に再燃することとなるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3673m/>

明清・群星興亡賦～親王ドルゴンの理想

2011年8月4日03時27分発行